





阿闍梨

後七日 公事根源云真言院  
淨修法正月八日より七日と  
あり今年金剛界あり明  
年八胎羅摩年よりりく  
修せしは後七日に修法といふ事也天長六年弘法大師が唐乃内道場  
准して去言院と云中よ立られて景和元年より大師即ち法を初めり  
東寺一の長老我が坊より元日より七日に同真言院より修せり  
ゆへに後七日と云也禁中元日より白馬の節會までハス事多き故に法内事  
す八日よりりくもろ也

後七日の阿闍梨者をお  
つじり事。いとうや。盗人ふ

阿闍梨 名義集阿闍梨或阿闍  
利或阿遮梨耶唐言軌範階  
言正行能糾正弟子行  
一年の相ハげ院中 是れその  
ゆは修後法よりよ警言と  
号して武に其具を用てさ  
こりきや一歳の相ハげ

あひよきるもの。病む人と  
てかくとくく。或よき

一年の相ハげ院中のお  
つじり事。いとうや。盗人ふ

朱道

りあしぬことあり

はいもの儀をらりん事

たやりあしぬ事也

車の五緒 五緒の事有識の

**五緒** 車は五緒は必人よふりす

われいものさくくかきと云  
ア大臣あとのかハ用られ  
まきやうあり

とふつきてさむらつと位  
みくらにぬれぬもの也と

とあつ人あがせり

冠桶 冠箱也もけものよ葉

**冠桶** 冠桶乃冠ハ昔よりハ

とへて漆ぬりよりかー地  
まき法あしとておびら  
成りきよてもあ

またくぬらうあり古代

の冠桶をもららう人

たをつきて今ハ用ふ也

**冠桶** 冠桶乃冠ハ昔よりハ

校よ鳥一双とそへてい

つきまつくすきもの

**冠桶** 冠桶乃冠ハ昔よりハ

とりらうよ花よもつらう

とりらうらう

畧中の面白 実平云也大藏  
冠二十四代の孫近清殿の  
一流也

付多枝の事

采五七尺五寸普通乃栢木  
よりハ葉せそくあくし  
らねとてよ毛おひらり是を  
も付う采と云也 一はよ云  
たど人采と云りのこと年の内を  
立枝と云るく 権をたよわ  
きて付く唯と云きそ付之  
采南きく唯をたよ

て付り春之雄と美取ら  
ゆへ也付や口傳あり或ハ  
梁を用とつとも春ハ梅秋  
おまよ付くし事の成也  
大臣木齋の附是を用ゆ又  
初考の粘維と人よつり守時  
の作法也又野より入れし  
へつりよハ三匹尺の梁の枝を  
刀めをつきとてかをわし  
らりて付や也一匹と付や  
うたーくお知人あり秦廉  
則説又口傳大納言隆親卿  
の説ハ梁のよき六七尺唯  
雄一匹と付や也又大臣木  
齋元服後徒如此の耐用之  
産取へをよ根むきけおね

つはらる事も存初儀と  
と中きれん。膳部ぜんぶに召し  
人およそを召して。東條り  
さうハとのさうおらんやう  
つきてはらせよと召されり  
くれん。むもあき極のえこよ  
むとつとつきまのせり。或  
揚りゆハ。梁付え。極の枝。

ふ付也義氏河原流野  
己人のとく雄とけつら  
梁ありねハ萩藩とて  
て何よても付く一説ハ松  
樹と付くあり山崎義  
家の初長ハ不付之説ハ  
萩藩の枝よ付小きとね  
葉の枝よ付く。雀とハ竹の  
えこよ付や也十月ハあ  
梁よ付とまりハ。河武久  
う説也並見河海抄  
下毛野武勝 續日本紀  
おは下野國をも下毛野國  
と書こえりて也。氏と尺  
えりり  
返り刀 木竹より

つがらる事とけつらとよはく。  
みまあともあはく。えこよ  
さ七尺或ハ六尺返り刀又か  
よき。枝の葉ハ鳥とけく。  
つらえこよます。枝あり。さ  
らおれらるぬよ。二面付へ。  
藤付はハ。むらり羽のたき  
にらるへてきりて。半付角

失記

ミリよきらうてうう後  
きりそくを返一カと云  
吾よあつ後

初書よ我とわあときつき  
先あささくぬ人を待たぬ  
あつあつひの毛

花よあつききととと  
以下吳中よあつあつは武勝  
うたよきつうとととととと  
云よ對一て云也

伊勢地流 じくわがきむが  
あつあつことととととと  
一きつうととととととと  
月より梅のつりえととと  
とつきくたてまうとと

正りれむらためととと花と

やうまたしじへ。初書はあつた  
枝とがしひけて。中門よりう  
まひてまう。大みきりのふは  
つひて。書。初とつきす。あつた  
あひのきはす。とととととと  
して。二じひれぬあつた。あつた  
かく。録と出さるぬ。肩にきて  
絲とてとりそく。初書といふも。

ととと一も日うぬ地とととと  
とととてととととととと  
ととととととととととと  
くひは海ととととと

事ハ。初書はととととととと

一がうとととと。花よきつきす

うありとと。月より梅の地ととと

うあつあつととととととと

あつととと。つり花はととと

岩かハ葉平也 枯が之安方也

あつたととと。あつたととと。あつた  
まうとと。あつたととと。あつた

事ハ。初書はととととととと

一がうとととと。花よきつきす

うありとと。月より梅の地ととと

うあつあつととととととと

あつととと。つり花はととと

岩かハ葉平也 枯が之安方也  
あつたととと。あつたととと。あつた  
あつたととと。あつたととと。あつた

業三品彈正阿保親上第  
 五男也故号在五中将忠  
 平一師尹一<sup>タ</sup>定時一<sup>タ</sup>實方十  
 一月十三日於任國卒<sup>タ</sup>友系  
 実方八中将<sup>タ</sup>あて<sup>タ</sup>一人也禁  
 中<sup>タ</sup>あて<sup>タ</sup>形<sup>タ</sup>成<sup>タ</sup>錫<sup>タ</sup>と<sup>タ</sup>あ<sup>タ</sup>て<sup>タ</sup>し<sup>タ</sup>わ  
 つ<sup>タ</sup>く<sup>タ</sup>冠<sup>タ</sup>と<sup>タ</sup>打<sup>タ</sup>落<sup>タ</sup>し<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>せ<sup>タ</sup>給<sup>タ</sup>  
 ま<sup>タ</sup>り<sup>タ</sup>り<sup>タ</sup>て<sup>タ</sup>袂<sup>タ</sup>枕<sup>タ</sup>と<sup>タ</sup>あ<sup>タ</sup>て<sup>タ</sup>し<sup>タ</sup>ま<sup>タ</sup>じ<sup>タ</sup>と  
 く<sup>タ</sup>奥<sup>タ</sup>列<sup>タ</sup>へ<sup>タ</sup>つ<sup>タ</sup>り<sup>タ</sup>は<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>別<sup>タ</sup>彼<sup>タ</sup>地<sup>タ</sup>お  
 て<sup>タ</sup>卒<sup>タ</sup>云<sup>タ</sup>

のやうに人はいよありうらとよみ給きう<sup>タ</sup>あ<sup>タ</sup>は<sup>タ</sup>れ

也。人のきうはひまう<sup>タ</sup>人<sup>タ</sup>信<sup>タ</sup>す<sup>タ</sup>ハ<sup>タ</sup>一<sup>タ</sup>年  
 系<sup>タ</sup>り<sup>タ</sup>く<sup>タ</sup>り<sup>タ</sup>し<sup>タ</sup>よ<sup>タ</sup>む<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>あ<sup>タ</sup>は<sup>タ</sup>れ<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>  
 と<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>ひ<sup>タ</sup>と<sup>タ</sup>め<sup>タ</sup>て<sup>タ</sup>給<sup>タ</sup>行<sup>タ</sup>ふ<sup>タ</sup>。実<sup>タ</sup>ま<sup>タ</sup>は<sup>タ</sup>  
 み<sup>タ</sup>く<sup>タ</sup>し<sup>タ</sup>よ<sup>タ</sup>。新<sup>タ</sup>の<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>つ<sup>タ</sup>り<sup>タ</sup>き<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>あ<sup>タ</sup>は<sup>タ</sup>れ<sup>タ</sup>  
 せ<sup>タ</sup>ハ<sup>タ</sup>。排<sup>タ</sup>や<sup>タ</sup>程<sup>タ</sup>多<sup>タ</sup>の<sup>タ</sup>を<sup>タ</sup>き<sup>タ</sup>れ<sup>タ</sup>を<sup>タ</sup>  
 お<sup>タ</sup>や<sup>タ</sup>え<sup>タ</sup>信<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>。吉<sup>タ</sup>水<sup>タ</sup>の<sup>タ</sup>和<sup>タ</sup>尚<sup>タ</sup>  
 月<sup>タ</sup>と<sup>タ</sup>め<sup>タ</sup>て<sup>タ</sup>む<sup>タ</sup>と<sup>タ</sup>あ<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>

吉水和尚 法性寺関白忠通  
 公子也 謚慈鎮 吉水今丸山也  
 月とめて めてハ愛とらう云

屋<sup>タ</sup>一<sup>タ</sup>り<sup>タ</sup>と<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>承<sup>タ</sup>と<sup>タ</sup>記<sup>タ</sup>信<sup>タ</sup>せ<sup>タ</sup>と<sup>タ</sup>の<sup>タ</sup>世<sup>タ</sup>一<sup>タ</sup>ま<sup>タ</sup>り<sup>タ</sup>ハ  
 ま<sup>タ</sup>り<sup>タ</sup>く<sup>タ</sup>は<sup>タ</sup>ね<sup>タ</sup>知<sup>タ</sup>る<sup>タ</sup>も<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>ま<sup>タ</sup>あ<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>せ<sup>タ</sup>と<sup>タ</sup>云<sup>タ</sup>  
 や<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>や<sup>タ</sup>一<sup>タ</sup>く<sup>タ</sup>い<sup>タ</sup>ひ<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>お<sup>タ</sup>や<sup>タ</sup>は<sup>タ</sup>じ

今出河院近浦 今出河院と云  
 龜山院名后常盤井相國実  
 氏公の孫中氣嬉子也即西  
 園寺公相公の山女也  
 今出川院を湯とて集と  
 のふあま<sup>タ</sup>と<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>人<sup>タ</sup>ハ<sup>タ</sup>一<sup>タ</sup>り<sup>タ</sup>と<sup>タ</sup>云<sup>タ</sup>

き<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>時<sup>タ</sup>つ<sup>タ</sup>ひ<sup>タ</sup>よ<sup>タ</sup>百<sup>タ</sup>首<sup>タ</sup>の<sup>タ</sup>あ<sup>タ</sup>ま<sup>タ</sup>と<sup>タ</sup>ま<sup>タ</sup>て<sup>タ</sup>か<sup>タ</sup>の<sup>タ</sup>あ<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>の<sup>タ</sup>社  
 乃<sup>タ</sup>は<sup>タ</sup>前<sup>タ</sup>れ<sup>タ</sup>ま<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>ま<sup>タ</sup>て<sup>タ</sup>書<sup>タ</sup>て<sup>タ</sup>は<sup>タ</sup>向<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>れ<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>。後<sup>タ</sup>よ<sup>タ</sup>や<sup>タ</sup>ん  
 一<sup>タ</sup>く<sup>タ</sup>あ<sup>タ</sup>は<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>あ<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>て<sup>タ</sup>。人<sup>タ</sup>の<sup>タ</sup>は<sup>タ</sup>お<sup>タ</sup>あ<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>あ<sup>タ</sup>ら<sup>タ</sup>う<sup>タ</sup>。

依文待序まゝとていまくかく人あり

押領使 東鑑七曰鎮守府將

軍兼陸奥守從五位上藤原

朝臣秀衡法師出羽押領使

基衡男 同九曰泰衡文治

三年十月繼父遺跡為出羽

陸奥押領使管領六郡

土おかげ 土大根也和名曰

爾雅集注曰音福和名於

保称俗用大根二宅

此押領使と

いふやうあるものゝまきりう。去

おかげのまよひはうきさ

と。おとあはは。やきて

念の事。年久しくぬぬ。或時

館のうちに人もあがりきりむとて敵とてい  
まゝのそかうめせめりうよ。館の内は共二人出きて

余はこれ一もは戦ひて皆退返してたり。いせ

不思ふし後よおやえて。目ころあはゆ抽し給ふは。思

人しぬ。そとむい。あは。い。う。う。人。う。と。い。ひ。た。れ

ん。あ。う。う。た。の。ま。て。あ。ま。ま。く。め。つ。る。土。お。か。げ。ぬ

ら。ふ。さ。あ。う。ぬ。と。い。ひ。て。う。せ。よ。う。り。あ。く。信。と。い

た。い。ぬ。せ。ん。が。ふ。海。も。あ。わ。と。き。う。う。よ。う。う

書厚の上人 性空平安城人 書字乃一人ハ法華讀誦の功

從四位上端善根子也

六根淨 眼耳鼻舌身意を六

根とす

つものう。六根淨より多く人

失道

大さのくくをたまき 世説曰  
 魏文帝嘗吟東阿主曹植七  
 步作詩不成者當行大法應  
 聲為詩曰者宜持作義深致  
 以為汁其在金下然豆在盆  
 中泣本自同根生相煎何太  
 急帝深有勸色 曹植字子建  
 魏曹操子文帝弟也

も。くくめく我をとまき。くくめと。けんさう物うぬ  
 こいひさりだうてまめうくくくとあうまといさう  
 かめりするまうやうていさり。いさり。いさり。いさり。  
 かるいしと也。かくまうくくくく。いさり。いさり。いさり。いさり。

ありたり。寝れりもなよ。さいつし  
 ろうよ。豆はくをたまき。まめ紙  
 者。ききうきれつ。くくとぶぶを  
 きく。いさり。いさり。いさり。いさり。

元慈 醜醜の年号也  
 清暑堂 拾芥中未曰嘗會

元應の清暑堂の清遊  
けんきう せいしよん ちゆう

五節於此所行之  
 玄上 琵琶のめん玄上の二  
 字もよきよとよむと濁て  
 よむとよむ也

玄上のめんよ きくてい  
 牧馬と強 たん 強きるに。強よい

禁秘鈔曰玄上累代寶物也置中殿御厨子根源鞠人不知之掃部頭貞敏渡唐  
 之時所渡比由二面其一牧紫檀直甲也大宋人曰紫檀者大様不可過六七寸  
 直甲之条不信云云但此甲非只物紫檀也凡此比也云躰云聲不可説未嘗有  
 物也為靈物人為跡之時有貴人如何跡又さうそくといふ人夢皆著直衣人  
 也靈物中越花以不淨手不可取昔無覆自迹此有沙汰有覆并臺也其臺無又  
 此琵琶靈駿肉裡燒亡之時飛出撥面文消所自有赤色不知其繪伏有沙汰  
 未次後房曰良通云比巴移玄上彼撥面文不可遠彼唐人打毬形也或曰玄象  
 吞青鉢之水所謂号玄象又玄上宰相献延喜帝仍号玄上兩説也但妙音院入  
 道付玄上説款

牧馬 撥面は牧馬と繪かく  
 一と入極とさうれりきれば。



かよあつげん

古事談曰牧馬與玄上丁雙  
 名物也時人不辨勝劣爰有  
 信義時雅三信明博雅三兩  
 人不知勝劣初信義彈玄上  
 信明彈牧馬更无甲し信明  
 彈玄上信義彈牧馬其聲雲  
 泥故時人皆云信明超信義  
 玄上勝牧馬云云  
 菊亭のゆゑ 右大匠兼季迄  
 らんまゝこれより 柱の字也  
 こころしくのり琵琶さくら  
 との琵琶のちひはとより  
 有りありめくは法師の琵琶  
 の柱ハありあや  
 きぬくき 衣被とがま女

むとらあらしより。所やとこ  
 ろよ。そくい城とらひまひ  
 づふよて。づきくればきれま。  
 神徳のよひふかたよやくむ  
 てことゆらまうともきおまひり  
 ろうきくくり有せん物見  
 きふ。きねうらふのよるん  
 とあらうともこのむうよま

のふせ

此きりくともまらかとせん

ふ城まらと。やうて面影をさるらる。あらしすう成。  
 する時又かひてさひつらまはれり。かう人へうまきれ。  
 首抱くころどきてても。びはの人乃家城をかせはてう。  
 ありせんおぼし。人も今スる人の中に。あひまそくらさ  
 を。誰もかくおがゆうよ。又いりあるお。まて人のいひ  
 とも。月よ尺のゆり物も。我の心はらちも。あふふとむい  
 つまや。あるまうと。おぼして。うとさひつてねまも。

まじしくありしはらばらるるは。まじらるるかくもよまや

<sup>七十三</sup>いやーけあり者。わらありは。個友のおがき。祝いわ

筆はおがき。持ち仏ぶつ堂どうは佛のおがき。龍りゆう裁さいはる若木

お我われは石いし若木わがきのおがき。庭にわは奇き樹じゆ怪かい石いしとありて

ちくむつ八はち真まあれもあまり。又また下したきとまらふらへし

文車ぶんぐるま。づくるまは今禁中いまきんちゆうはあ。又また東寺とうじもあり。失火しつぱの

との時ときをやく引ひ出ださん。為なの用もちあり。らりつら。塵ちりとすつら。文ぶん塵ちり塚つかのらりつら。

文塵塚のらりつら

わいのき。無愛むあい河海かかい無む前ぜん派はい流りゆう。類聚るいじゆ。活かつ氏し桐どう壺ぼはあ。目めとそんめつとあり

<sup>七十四</sup>世よはがらつてあつと。滅めつはあのか

きまや。おがくはれ。虚うつろえあり。

あつはもさへ。人ひとの物ものとひあすま。ま。うて年月ねんげつすま。はらひ

もへつ。ねね。ひまきまはらりあり。筆ふではもがき。つら

めねきは。やうてはら。ありね。みちくの物ものは。ま。は。い。し

か。こ。ま。頑がんの字じ也なり。き。事ことも。か。こ。く。あ。る。人ひと。は。な。り

志しはね。さ。く。ろ。の。神かみは。と。く。よ。い。と。も。道みち志しは。人ひと。を。

さ。く。ろ。は。位いま。い。い。ま。す。ま。る。は。き。く。と。か。ら。つ。時ときと。ハ。何なに事こと

とらうらうらもみあつ。かひあつらうらうらもみあつらうらうら  
まみあつらうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうら  
うらうらうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうら

鼻の初し初めきき

木よんかの目くうかひめき

うらうらあつらうらうらもみあつ

うらうらあつ

うらうらあつらうらうらもみあつ

人の目くうかひめき

うらうらあつらうらうらもみあつ

あつらうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうら  
うらうらあつらうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうら

うらうらあつらうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうら  
うらうらあつらうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうら

面はあつらうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうら  
す。諸人の鼻はうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうら  
物とてうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうら  
あつらうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうら  
おがき世ありうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうら  
まよふらうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうら  
人の物くうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうら  
うらうらあつらうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうらもみあつらうらうら

論語述而子不語

失道六三

二才乱神

仏神の奇持権者の伝記

仏種をたぐく載る所の佛  
菩薩鬼神の非愛奇持又  
神明の不測ありしこそか  
権者化身のそく人よあり  
さこそこの傳記も不思議  
多う人一皆くいつり  
と定るくといふ事也

金永三

はりんと佛神は奇持権者の  
傳記。さのこ伝せざるへきり  
もあつて。うれき世俗の虚  
えと念比は伝一たるもあ  
くもあつて。よもあつて

いふもせんあをせむ。大くつはまよとくあひら  
ひて。傳いんよ伝せむ。又うこうひあききりへうくは

蟻のこくよあつたり  
文程は蟻同しなり

七五  
欄乃

欄乃とくはあつたりて。東西に

いふき。南のまじり。あ。さ。き。あ。り。の。や。し。た。あ。り。む。た。ら  
ありとくきある。は。あ。り。ゆ。家。あり。な。ま。い。ひ。て。お。よ  
お。く。い。ま。む。い。ま。ふ。い。ま。や。ま。む。い。ま。り。お。い。ま。あ  
て。や。む。時。あ。り。か。と。や。し。あ。ひ。て。何。と。と。う。ま。り。お。い  
あ。あ。く。と。老。と。お。と。あ。り。ま。き。し。う。事。す。い。あ。ふ  
して。念。の。つ。る。よ。と。あ。り。は。き。と。あ。つ。る。あ。ふ。た  
の。ひ。う。あ。り。ま。い。へ。る。もの。は。れ。と。お。い。ま。り。あ。り。は  
お。か。き。て。さ。の。途。の。近。き。と。越。う。り。み。の。あ。り

扶道卷三



いさくやめりて止観  
乃赴也

まろくまらん  
摩訶山歎くも侍り

世のおりえりあやうあり

世のおりえりあやうあり

冒貴威勢羨廉のひとあり

かきまもころこひも 或ハ葬葬

愁歎のま時もあり或ハ婚礼

冠礼後儀の時もあり

あやぬ申よ。いし法師の海

あていひへすいさくころころすもとんゆまじさる人

き故あやもとも法師き人よこころてありあん

七十七

母申にぞも人のおりあつひささよひあへる事。い

ろふへきよあつひささね人のよくあふ肉をりて人よえ

くさるまじいさひきくたろころころきく世ね

とふかきりる事あり。聖法師あも世れ人の上

はこりこころるきていさくころころきく世ね

えゆるあてころひちころす世ね

今やうの事 新樂府の時

勢頼とよていさくころ

今やうの事ともあつひささ

たよより

いさくころころきく世ね

まね世はともありころあてきくねんかよろ。今又

人あつあつ時あつひささよひつきたる。とくらき物

乃心も心はふらうとち。あこちうらひうらう。目こ  
 あつせまらひあしてかきぬ人なほほすあつす  
 事。せまあれよくぬ人のうあうひあう事あり  
 何事もへてぬらうらうそよたよこ人のあり  
 たるもしてまのまうりやあひあうと田舎あり  
 何物もへてぬらうらう。よろつたぬまほほうらう  
 在らうらうらうきこくかあき  
 人といふこ  
 におろく 禮記ニ口容上と云  
 主人不向客 臣士國といへる  
 うらひすれ。まは世よらう  
 うきうもあれと。うらうも

よあまのこ一也執事

あり。よくよきまへらうみちよあ。必はたもく。あ  
 ぬらうらういそぬらうらうきれ  
 人いそ我分はも起る城のまうとれめ。法師  
 夷 哀うてき田舎の武士  
 とさす  
 上選部 公卿也殿上人者四  
 位五位六位あり  
 氏とこのむ人おらう  
 左傳衛公子伋呼驪人之子  
 也而安而好兵又曰列呼阻  
 兵而安忍阻兵也 孫安忍無  
 いそみちらとなて。あひはとあ  
 王者ニシカ父ニ云  
 らむくまあまらひ。仏法あり  
 うらきまらうし。連款一後  
 結とくまらうあり。されと

南都山嵐僧記抄

親衆叛親離難以敵矣夫矢猶火也弗戰將自焚也

百戰百勝非善之善者也不戰而屈人之兵善之善者也

山谷詩百戰百勝不如一忍

矢つき矢きハあまき

司馬遷報任少卿書曰李陵

手匈奴單于連戰十有餘日

一國共攻而困之轉鬪千里

矢盡道窮救兵不至士卒死

傷如積陵未沒時使有果報

漢李陵王侯皆奉觴上壽後

敵子降らす 通鑑綱目第二

韜五死之也執事次之以

人傷トをく會歎よりき

孟子雜婁上篇曰爭地以戰

殺人盈野爭城以戰殺人盈

城此所謂率土地而食人肉

罪不容於死故善戰者服上

刑連諸侯者次之 莊子說

劍篇曰庶人之劍蓬頭突鬢

異於鬪雞一旦命已絕矣無

所用於國事今大王有天子

之位而好庶人之劍臣竊為

大王薄之

とあつたあまきをいれく道よりあま

ふあひあまうれぬへし法所

のまもあつたは上達初敵上人

くまきハあまきハあまきハあまき

このむ人あつたり首をいれ戦て

百戦百勝ともいふは武勇乃

あまき定くく。その人ハ運小

あつてあまきとくく時勇者

よあつたあまきハあまきハあまき

き矢きハあまきハあまきハあまき

降らぬ死をやさくしては始て

あまきとあつたあまきハあまき

あまきハあまきハあまきハあまき

あまきハあまきハあまきハあまき

あまきハあまきハあまきハあまき

あまきハあまきハあまきハあまき

あまきハあまきハあまきハあまき

あまきハあまきハあまきハあまき

あまきハあまきハあまきハあまき

あまきハあまきハあまきハあまき



屏風障子あまの繪も文字もかこられあつ筆や  
 うしうかふたうりんよく記るも。霜はあつこれ  
 けこあくはがゆう也。大くこもてつ調友よても。か  
 ととりせらるるやとあるねし。そのまよき物と  
 持へしとももあつは換せさつんためとてあま  
 見よらきつらふよ志あつ。あつじりらんとて。用あき  
 しくも志さく。うううくこれこあせつたつあ也。  
 かつめじきつらふよ志あつ。あつじりらんとて。用あき

くそ。抱く。ひく。きり。ら。た。あり

うすもの 漆皮よあのちく  
 産のるうー羅の字とさす  
 とのよめり

倭名唐韻曰羅 魯何及此問云 良一云 蟬翼

綺羅也らのよとさすよ  
 のよもあり囉爾の囉れ  
 くのよー羅ハ金紗あま  
 けつらあま

額阿 小野、大納言、結実

ねらんのちく 螺鈿軸ハ卷が  
 の軸ハ貝とせらるる也  
 世継上云いよあまのあひや  
 ともあこのちくこ螺鈿の箱よ

けすもの 表紙ハ。と。換す  
 うす抱か。も。さ。羅てん  
 の軸ハ。貝。お。ら。て。ほ。う。ら。み  
 ー。き。れ。と。は。し。ら。ふ。ま。さ。り  
 て。お。お。し。り。一。部。と。あ。る。ま。さ。り  
 ま。ま。の。お。あ。や。う。も。あ。ら。ぬ

弘融傳教

弘融傳教

弘融傳教

弘融傳教

弘融傳教

弘融傳教

弘融傳教

弘融傳教

弘融傳教

弘融傳教

のうら

百篇

の六官

格物の傳

或人

肉の文

何

竹林院

おわ

さあ

出家

洞院

洞院左大臣

一位左大臣

相國

元龍の悔

先追

二

有悔象曰亢竜有悔盈不可  
久也又曰亢竜有悔于時借  
極亢之為言也知進而不知  
退知存而不知亡知得而不  
知喪

月みりてを 易豊卦日中則  
昃月盈則食天地盈虚與時  
消息 釋名云月缺也滿則  
缺

盛者必衰

法頭 高僧傳第三梁惠較所  
撰法頭傳曰釋法頭姓龔平  
陽武陽人也  
故卿 ころあくハ支那とす

漢の食 支那、上唐、三代  
より下元明より多うまて教  
千年の月代々の号おかき  
として漢といひ唐といひて  
支那の惣名とすしこハ漢  
ハ世をたもつこと百十年  
あまり李唐ハ三百よ及ぶ  
よそ全盛の時をとりてそ  
とろやびえ於韓人崔溥  
漂海録にもあり和漢といひ  
倭唐といひもけ哉也  
人の國 他國といふ春日有祚  
の佳宜ハ他國より我國の  
化人より我人のとまり

い事と寸か志結て相國の望  
にせよりきり。亢龍の悔あ  
ことるや。いふこと行つあり。月  
満ていけ。地盛よりいふは  
ぬ。ころろ乃こころまれつあり  
はる。あふはらつきみらあり  
法頭三卷乃天竺よりころて。  
故の扇とていふあ。い。病

おつてハ漢の食をぬひ  
きふこととまきて。さうりの  
人の。毎下よころんより記ま  
減。人乃國よりいふえにまひき  
れと。人のいひ。ハ。韓信都  
徳は情あるとまら。ま。ま。あ  
ま。ころし。法師のま。ま  
あ。い。い。く。あ。い。し。う

論語

正色の人かきりたるん  
十室之邑有忠信といひ孟  
子性ハ善也といふ心也

賢とてくやむ 論語里

仁篇見賢思齊章見不賢而  
内自省也

賢ある人を見て 大学人之

有技嫻疾以悪之人之度聖

而遠之俾不通

下愚の性 論語陽化篇上智

與下愚不移

犯人のまひ 狂走不狂人走

淮南子曰狂者東走逐者東走

車走則同所以東走則異

悪人のまひ 揚子法言三曰

人之性也美惡混脩則善則

正色の人かきりたるん  
十室之邑有忠信といひ孟

子性ハ善也といふ心也

賢とてくやむ 論語里

仁篇見賢思齊章見不賢而

内自省也

賢ある人を見て 大学人之

有技嫻疾以悪之人之度聖

而遠之俾不通

下愚の性 論語陽化篇上智

與下愚不移

犯人のまひ 狂走不狂人走

淮南子曰狂者東走逐者東走

車走則同所以東走則異

悪人のまひ 揚子法言三曰

人之性也美惡混脩則善則

善則美惡混脩則善則

善則美惡混脩則善則

善則美惡混脩則善則

為善人脩其德則為悪人

たてんもすさうもなるものさういふんかゝるもては

悪人かゝるもては

善人かゝるもては

善人かゝるもては

善人かゝるもては

善人かゝるもては

善人かゝるもては

善人かゝるもては

驥と劣る 揚子法言三曰

駟驥之馬亦驥之乘也駟驥

之人亦頹之徒也

舜と劣る 孟子滕文公上云

頹淵曰舜何人也予何人也

有為者亦如是

孟子告子下云曹交問曰人

皆可以為堯舜有諸孟子曰

堯舜之道著弟而已矣子服堯之服誦堯之言行堯之行是堯而已矣子服桀之服誦桀之言行桀之行是桀而已矣

惟繼 一平子伊嗣云八非也

惟繼中納言平氏西洞院嫡流也

風月の女とめり 詩文文章の女也とめりといふはわがくわが女に因修僧心 伊平大納言此孫之風雅集も前権修心因伊比忍待急の心とよめり云々  
らひ乃は彼も人ぬとほくめり云々  
少くあつてをよまされてもまの文保 花園院の年号は元年

孫は徒あり。つらつらても受んとまらんと受るといふ一

惟繼中納言。風月の女と

とめり人也。一生精進して。淡

雅らして。寺法師の因修

僧心と。因宿して侍きつふ。

文保子と伊守やうれし時。坊

主よあひて。此坊といふ寺法師と

三月廿五日山門より三升寺と焼くあり

寺法師 法山多しといへども山とつりつ小村ハ比叡山也法寺多々れども寺とつりつ小園城寺也園城寺ハ別ニ升寺也

秀方 秀逸の法方と云々ありあれとくめてハ排法の戯言也

下坊 下坊の老と

かまへきことあり かつふ

ナ人きこ

中じつひ 服つゝ海一紙  
む倭人  
ちつろありりともう 在後の  
倭人は八具差坊の細也

くつとつこと。寺はなせれば。

今よりハかきとととと。

さゆんといはれり。いじ

き秀方白ありき。お茶

部は酒のますり。事心はか

こと也。字法は任きられた。系

小果実を有とて。あまめさころ

随世の僧と。こころとありき

うとのとぬ 源氏夕秋の巻  
 なくくともさぬとあり  
 はやくたつて河海よ  
 志にうつくしくとくくせ  
 ねをのこそまくくくくせ  
 源氏類聚よめくハ終ると  
 あり今こくめてハ終るとむ  
 と見つへきこ

さつらつらよ中むらひさう。或時  
 迎よ馬松つらうくをねる。  
 つらうらつらあり。はつきのあつて  
 おえん一夏せさうあよとて酒を

くくくね。うきくくくくくくく  
 らきそくひくしきまねん。神もくくおれんて。良  
 果してゆりよ。本情のりりよ。あつらひ法師  
 の志士あり。果してあひらうよ。げ男さつむらひ

て日暮ひらう山中よ。あやしきことありいへん  
 して。ち刀とむきぬきせねん。人もみおち刀ぬき。  
 矢もきるべしきうと。果美本も手をとるるも。  
 うへ心 万意は現心とあり  
 源氏類聚はうへ心ありぬ  
 よら狂乱を  
 まきて 狂の字也程とまけ  
 くと見いころく

うは公あく碎ころもれよ。  
 まきてゆうらつらんといひを  
 せん。ものく。あつらひ男

果美本房よあひて。は坊をいおき事志とあひ  
 流う物うか。どのまゐひらう事侍らひ。その名侍ら

とすう銭ぬむらたらむのくはし給ひつらも  
 いらるて。むいさるふはきりおしつ。まへはらあ  
 べののしむくれを。軍人おるまへ出あへ。これこ  
 うふしむらむらひて。むらうりつ。きりまひり  
 せらふ。あましして。おかせ。打せて。去りり。せら。  
 馬ハ血つきて。宇治大路の家ふる。まへ入らり。涉あき  
 まし。そ。おのこともあまし。らり。これ。果  
 美衣を。きり。あ。り。ら。は。あ。ひ。か。へ。ら。あ。ま。い。

又此  
 百と周  
 見地  
 頼職  
 必妙ナリ  
 弘テ  
 者アリ  
 多ノ  
 明帝  
 法ハ

くらあ糸 本備の意り  
 くらあ糸おり 彩衣合に  
 知衣の意り  
 本備山ありハさあ。くはあ。の  
 くらあ糸おり 彩衣合に  
 知衣の意り  
 本備山ありハさあ。くはあ。の  
 くらあ糸おり 彩衣合に  
 知衣の意り  
 本備山ありハさあ。くはあ。の

先出さぬ。うき。も。て。き。ら。か。ら  
 き。命。し。ま。し。れ。と。腰。き。り。換。を  
 ら。れ。て。か。し。ら。ま。あ。り。に。ら。り  
 或者小野道風のうき。お。和  
 澄朗詠集とて。き。ら。き。り  
 き。ら。銭。或。人。内。相。傳。う。き。ら  
 事。の。へ。は。ゆ。ら。あ。れ。も。に  
 糸大納言とて。き。ら。き。り。物

十一歳  
 三年生萬壽三年入道時六  
 公任卿也康保

後  
和漢朗詠集

送凡死云公任純生丸等  
和漢朗詠集 公任の撰する所  
上下をあり者ハ少とつぎ  
てうひらるとみん日なりと唐  
人の詩文の詞を撰よありて  
和漢と号する詩文と和字と  
載ぬ云く但和字ハ公任後  
の人書加るる世傳大二條関  
白教通を聳ろして朗詠  
を引か抱は撰まるとみん

同也  
公所請

和名猫 音苗 林 善捕  
鼠也 金花猫ハ美なる猫也  
けて婦女をわけて煩ま  
すも雄猫はわされらる雄  
とらうして見を流し唯猫う

貴人ノ公

和名猫 音苗 林 善捕  
鼠也 金花猫ハ美なる猫也  
けて婦女をわけて煩ま  
すも雄猫はわされらる雄  
とらうして見を流し唯猫う

者所寫

和名猫 音苗 林 善捕  
鼠也 金花猫ハ美なる猫也  
けて婦女をわけて煩ま  
すも雄猫はわされらる雄  
とらうして見を流し唯猫う

女不

和名猫 音苗 林 善捕  
鼠也 金花猫ハ美なる猫也  
けて婦女をわけて煩ま  
すも雄猫はわされらる雄  
とらうして見を流し唯猫う

真之

和名猫 音苗 林 善捕  
鼠也 金花猫ハ美なる猫也  
けて婦女をわけて煩ま  
すも雄猫はわされらる雄  
とらうして見を流し唯猫う

此益

和名猫 音苗 林 善捕  
鼠也 金花猫ハ美なる猫也  
けて婦女をわけて煩ま  
すも雄猫はわされらる雄  
とらうして見を流し唯猫う

稱古

和名猫 音苗 林 善捕  
鼠也 金花猫ハ美なる猫也  
けて婦女をわけて煩ま  
すも雄猫はわされらる雄  
とらうして見を流し唯猫う

稱古

和名猫 音苗 林 善捕  
鼠也 金花猫ハ美なる猫也  
けて婦女をわけて煩ま  
すも雄猫はわされらる雄  
とらうして見を流し唯猫う

稱古

和名猫 音苗 林 善捕  
鼠也 金花猫ハ美なる猫也  
けて婦女をわけて煩ま  
すも雄猫はわされらる雄  
とらうして見を流し唯猫う

稱古

和名猫 音苗 林 善捕  
鼠也 金花猫ハ美なる猫也  
けて婦女をわけて煩ま  
すも雄猫はわされらる雄  
とらうして見を流し唯猫う

稱古

和名猫 音苗 林 善捕  
鼠也 金花猫ハ美なる猫也  
けて婦女をわけて煩ま  
すも雄猫はわされらる雄  
とらうして見を流し唯猫う

稱古

和名猫 音苗 林 善捕  
鼠也 金花猫ハ美なる猫也  
けて婦女をわけて煩ま  
すも雄猫はわされらる雄  
とらうして見を流し唯猫う

稱古

和名猫 音苗 林 善捕  
鼠也 金花猫ハ美なる猫也  
けて婦女をわけて煩ま  
すも雄猫はわされらる雄  
とらうして見を流し唯猫う

稱古

和名猫 音苗 林 善捕  
鼠也 金花猫ハ美なる猫也  
けて婦女をわけて煩ま  
すも雄猫はわされらる雄  
とらうして見を流し唯猫う

金抄卷二

三十二

と道風明んこと時代やた  
りひ侍らん。ねかつつあはく  
とらひきれん。さひへん。世よ  
ありう。た。抱まの侍る。たれと  
て。いよく秘蔵し。き。如  
奥山は猫あひらふも乃あを  
て。人ともふあると人のひら  
るに。おあひらふも乃あを

れくされらるハ唯とらうて是を  
治むと云事後耳後月令度  
哉と云書よ及てうり  
何所 ちんちんあはく  
行願寺 元亭釈書十四云釈  
行園鎮西人寛弘二年遊帝  
城頭戴寶冠身披華服都下  
呼為華上人於賀茂神社側  
堂行願寺安手像以圓衣  
華俗呼行願寺為華堂

猫のへあつて。ねこあつては  
ア。人ともふあると人のひら  
るに。おあひらふも乃あを  
て。人ともふあると人のひら  
るに。おあひらふも乃あを

て。いよく秘蔵し。き。如  
奥山は猫あひらふも乃あを  
て。人ともふあると人のひら  
るに。おあひらふも乃あを  
て。人ともふあると人のひら  
るに。おあひらふも乃あを

金抄卷二

三十二



ちい。あやましとあし。く。い。よ。は。ま。き。て。や。う。て  
 う。き。つ。く。ま。よ。く。も。の。れ。と。さ。く。う。ん。と。守。肝キナも。を  
 て。せ。う。ん。と。す。う。よ。カ。も。あ。く。是。も。う。く。は。川。へ。こ。ろ  
 ち。へ。て。だ。ら。き。よ。お。ね。こ。ま。い。お。か。く。よ。さ。き。ハ。あ。く  
 よ。り。松。と。も。の。さ。く。さ。く。と。ら。も。と。て。ん。は。い。は。い。さ。り  
 よ。か。う。一。ま。ら。う。傍。あり。こ。は。う。よ。と。て。河。の。中。より。い  
 き。お。く。一。これ。連。言。の。う。き。と。れ。と。り。て。扇。小。終ニヤミ  
 連。言。の。け。拍。賭カケ  
 み。と。懐。は。持。こ。り。き。る。も。あ。ら。よ

い。ら。ぬ。希ケあ。ら。う。て。た。と。り。り。う。う。さ。な。り。て。  
 ふ。く。家。よ。入。り。り。か。ひ。き。る。大。の。く。き。れ  
 と。ま。ん。成。志。り。て。と。む。つ。き。こ。り。き。る。と。う  
 本。納。法。原。乃。が。一。つ。い  
や。と。う。取 安。良。殿。と。去。致  
 一。し。終。九。や。と。う。あ。つ。か。も  
と。し。つ。ら。ま。ち  
 の。と。ま。ら。う。て。つ。ひ。よ。き。い。ぬ。い。し。よ。が。或。時。あ。つ。ら  
 る。り。き。こ。う。と。法。原。の。く。く。ゆ。き。つ。う。と。と。い  
 一。し。は。や。と。う。取。の。う。り。ま。る。と。て。い。と。い。ふ。う。ら。乃

やまゝ教へ思ひ法師うと文とつれて。神なきあ

神なきありて。まらうと。せて。いづらん。頭をハズハ  
めう折欬

すところへ中さ。まところのらりれんえさうりきん

赤吉日 赤口日也 通書大 九 **赤吉日**と云事。陰陽道ハ

全日赤口日忌會客證事買 九 **赤吉日**と云事。陰陽道ハ

賣。又云主口吉宣事。 九 **赤吉日**と云事。陰陽道ハ

かろよみよわぐりとあ是。 九 **赤吉日**と云事。陰陽道ハ

也口と吉と因一也。 九 **赤吉日**と云事。陰陽道ハ

陰陽道 職原陰陽寮掌天文 九 **赤吉日**と云事。陰陽道ハ

曆數事昔者一家兼兩道而 九 **赤吉日**と云事。陰陽道ハ

賀茂保憲以曆道傳其字老 九 **赤吉日**と云事。陰陽道ハ

柴以天文道傳弟子安倍晴 九 **赤吉日**と云事。陰陽道ハ

明自此已後兩道相分 九 **赤吉日**と云事。陰陽道ハ

うりし事去りし事うまひす。ゆりし物也

うしあひつ。企くたりしとあひん。とふさうり也

去見改えりてあしう日されはあまをねと

うまてんも。又礼ううるん。もあへあま

無常變易の境 涅槃經諸行 一 **無常**變易のうらひありと見

減為樂 天台四門有門空門非有非 二 **空門**亦有亦空門。

知り幻化あり 因覺經幻身 三 **幻**亦減幻減之故非

幻不減

常變易のうらひありと見

不ものも存せし始あり

事も改あり。忘はともきと

改ハくも。人の心不空

何事なくしては後なる 釈氏

一は成住壞空の後あり

有見は悪とすすは必凶あり

たとへばくくくみ老の卦の凶

よあされとも善とすをこれに

必善ありとす

あり。拙者初化あり。何事なく志

くくくも後なる。けり理とさく

さう也。有見は悪とすすは

必凶也。悪見は善とすすは必凶あり

とす。有見は善とすすは必凶あり

引つ。中庸子曰射有似乎君 紅 或人引つることをからふよ。

引つ。中庸子曰射有似乎君 紅 或人引つることをからふよ。

引つ。中庸子曰射有似乎君 紅 或人引つることをからふよ。

てらう。彼のの矢は多とさうりれんあり。毎交は

得失あり。こ乃一矢は定へしとてと云。易

くふ二れ矢。師のおよそむとらとをさうくは

とさうんや。悔意のかさうくはとていへとも。師

乞をさう。げいありめ万事たりとてさうへし。

道と學とさう人。タムハ知あ

らんしとを思。訓あつたあ

しとをさう。くさして急なり。修せんしとを新

道と學とさう人 論語里仁爲美 朝聞道夕死可矣 朱文公 勸学文勿謂今日不學而有未 日とさうる義は通せん

一刹那 一彈指頃タ五劫

せりいりんや一刹那タ

うらりををつく。悔急ケのふありこととさうん  
や。めんうあ今此一念りをつく。きうらふ  
す家と志志のたあ

報レ張りの若あり。買人明日をあらひもあ  
るて牛ささんといふ。報れよふ牛はねがらん  
とすう人よ判あり。うらんとすう人よ換タあり  
にうら人あり。是どきしてうらありめいりく

牛れま後換ありといふ。あし人ある判あり。  
も故の生あるとれ死のらういふ。あしうら  
と。牛改タよあうあり。人まうあう。うらう  
よ牛を死らうらうにまの存せり一日れ

一日の命 大智度論曰設タ満  
世界寶無有直身命  
鵝毛カうりも 司馬遷報伴サ  
卿書人固有下死或重於本  
山或輕於鵝毛  
死シとくまゝん 孟子告子篇  
二亦我所欲死亦我所欲

命万金カうりもあまう。牛  
のわらひ鵝毛カうりも輕タし。  
万金カ改えそ一換とらじま  
人換ありといふへうらうら

皆人歎くを理ハ牛の如くはかき入るる  
 とらふ。又いふく。され人死よもくまらむと  
 ぞへ。存命の候もまたの。一もいんや。  
 ともうある人け樂よめられてる。う  
 かの。いひ。いんや。いんや。いんや。いんや。  
 うく。此の賦をむい。あつ。あつ。あつ。あつ。  
 いき。る。る。生。成。の。一。ま。す。一。て。死。は。臨。て。死。  
 生死の相よ。う。う。守。釈。氏。ハ  
 不生不滅を涅槃。生死

即涅槃と云。機。本。一。聖。惠。此  
 八識田中。阿字。一。乃。生。死  
 亦斷。涅槃亦斷。と。い。ひ。莊。子  
 う。死。生。大。多。逆。と。も。變。と。ら  
 り。あ。く。と。く。す。と。い。ひ。老。子。の  
 死而不亡者。壽と。い。ふ。是。皆  
 生死の相。あ。つ。と。い。ふ。は。を  
 云。あ。つ。  
 實の理と云。う。女。我。第。一。  
 心。名。不。生。亦。復。不。滅。心。即。實。  
 相。  
 人。よ。く。あ。き。げ。る。老。子。の  
 下。土。ハ。道。を。安。く。と。ら。よ。と。い  
 づ。を。

人皆生成の。一。ま。さ。る。を。  
 死をおう。せ。さ。る。ゆ。へ。あり。死  
 成。何。れ。さ。る。ゆ。へ。あ。く。す。死。の  
 ち。う。き。事。成。ま。す。と。い。ふ。あり。を。  
 一。又。生。死。の。相。よ。あ。つ。う。  
 す。と。い。う。實。の。理。と。云。う。  
 人。よ。く。あ。き。げ。る。老。子。の  
 下。土。ハ。道。を。安。く。と。ら。よ。と。い  
 づ。を。

半盤井相國 身氏も也公陸

△の子西園寺流也

北面 上水面下水面とてわ

り上水面ハ伏大丈也下水面

面ハ五位六位階代の侍と云

ふ倉院守目備堂の額と

平等寺と号し宸翰と賜ふ

ときよ勅使車よのりなり

内陣へやちとて勅額を

納るなり彼寺の縁起よ

あり勅せりしる人き車

るより下内き也

よつり小まづりひへきとやされきれば水面よりあこ  
れよなり。勅書紙馬の上よりさききりてんを

井の 勅書と持しる水面あり

馬より取りしるを

お國は水面ありハ勅

書と持ふり下馬志行り

一者也。取の者いりる

おつり小まづりひへきとやされきれば水面よりあこ

きり、よつりへ。おつりへくすと地

よれよハ軸よ 軸よハ表

紙よハ右也背の文紙ハ表

池よハのやよハ一方よ付

ると又えり満一筋也右

左のうんを引とて一

方よ一筋むとぬえ流り

と付るとよハ

おつりへくすと地

事。いつてよつき行りへき

と。あつ背儀の人よ取付

軸よつき表紙よつり

事。表紙あれ。いつても種あり。文の紙ハ

くま右よつりよれよハ軸よつりよ

しと也。や作らむ

あるをカ 説く不同 猪鬣猪鬣ありみとふ事あり。くら

上今の世俗るをこころひ之 和名集曰猪耳之訓一夫習

精と訓す猪鬣考本草論 蛇咬説子一葉葉頗同葉耳

とありは故に今俗めをこころひ也 地菘本草曰地菘即天名精其實也

主蠱蛇毒接傳之云云 又本草菴耳の条下は治毒蛇并射上等湯瀝葉一

握研取汁和温酒而灌之將澤厚毒微處 秘曰猪鬣を世俗にめりて

りよき也 天名精 地菘 鶴虱ハ一物也此三をめりてこころひ又通

て是をいのみり草とりよく但鶴虱ハ實也されとも世俗菴耳も蛇咬つと

と又さうりされともさうつとありまれば地菘の説是此書の説は

お合ふり所詮いのみり草は俗ありやとさう一人但兼好時代は

地菘をめりてこころひさうりや

スーパケをくへー

小人は賤あり。君子は仁義

老子曰大道廢有仁義 莊子駢拇篇意仁義其非个

情乎彼行人何其多憂也行 義又奚連如膠漆繩索而

遊乎道德之間哉使天下 惑也原代相仁義以獲天下

也奚必伯夷之是而盜跖之 非乎天下盡殉也彼取殉行

義也則俗謂之君子其所殉 貨賤也則俗謂之小人其殉

一也夫適人之適而不自適其適雖盜跖與伯夷是同為滑稽者也余愧乎道德

具以上不取為仁義之操而下不敢為滑稽之行也 同馬蹄篇毀道德以為行

義聖人之過也 同賤箇篇攘棄仁義而天下之德始去同矣

僧は法あり 源氏物語子言祥天女法をこころひとあり 維摩經云法猶可捨

物よつきて其物どつひ

や一そとふ小地教とさう

いあり。君子風あり。家あり

風あり。國に賊あり。小人

小賤あり。君子仁義あり

了。僧は法あり。かこころひ

而况非法ヤ 止觀ニ 觀法ニ 雖正トス 著心ヲ 同邪トシ

鈔卷二

三十一

九  
事ノ 一ノ 二ノ 三ノ 四ノ 五ノ 六ノ 七ノ 八ノ 九ノ 十ノ

一ノ 二ノ 三ノ 四ノ 五ノ 六ノ 七ノ 八ノ 九ノ 十ノ

一ノ 二ノ 三ノ 四ノ 五ノ 六ノ 七ノ 八ノ 九ノ 十ノ

一ノ 二ノ 三ノ 四ノ 五ノ 六ノ 七ノ 八ノ 九ノ 十ノ

一ノ 二ノ 三ノ 四ノ 五ノ 六ノ 七ノ 八ノ 九ノ 十ノ

糖法瓶 瓶ハ下あり 糖瓶 瓶ハ下あり 糖瓶 瓶ハ下あり

糖瓶 瓶ハ下あり 糖瓶 瓶ハ下あり 糖瓶 瓶ハ下あり

糖瓶 瓶ハ下あり 糖瓶 瓶ハ下あり 糖瓶 瓶ハ下あり

一ノ 二ノ 三ノ 四ノ 五ノ 六ノ 七ノ 八ノ 九ノ 十ノ

一ノ 二ノ 三ノ 四ノ 五ノ 六ノ 七ノ 八ノ 九ノ 十ノ

一ノ 二ノ 三ノ 四ノ 五ノ 六ノ 七ノ 八ノ 九ノ 十ノ

一ノ 二ノ 三ノ 四ノ 五ノ 六ノ 七ノ 八ノ 九ノ 十ノ

一ノ 二ノ 三ノ 四ノ 五ノ 六ノ 七ノ 八ノ 九ノ 十ノ

一ノ 二ノ 三ノ 四ノ 五ノ 六ノ 七ノ 八ノ 九ノ 十ノ

一ノ 二ノ 三ノ 四ノ 五ノ 六ノ 七ノ 八ノ 九ノ 十ノ

一ノ 二ノ 三ノ 四ノ 五ノ 六ノ 七ノ 八ノ 九ノ 十ノ

一ノ 二ノ 三ノ 四ノ 五ノ 六ノ 七ノ 八ノ 九ノ 十ノ

一ノ 二ノ 三ノ 四ノ 五ノ 六ノ 七ノ 八ノ 九ノ 十ノ

佛地卷三

三十一



もあつて一車やもたかえん

現川の相國 基具公也久我の  
の二門也

百 堀川相國ハ義男代りしき

る差 おこれ不依あり  
大理 職原曰檢非違使此也

人よりそを事とあくるは

淳和天皇御宇天長年中初  
置之異朝尤重此職昔唐虞

これと強たり。衣子基後也

代韓陶為上此云大理周礼  
立官之日大司寇即此任也

大理よありて。廳勢かおこ

後代置大理寺本朝又以刑  
部省為糾判之官天長年中

これくろよ。廳屋の唐櫓み

准唐朝置使廳蓋是大理寺  
也但別當以下為宣下職為

ろくもてめてくつり

衛府之人補之云 別當下  
人唐名太參議已上九擇其

あくもらるるきよう。保れ

人也補此職之人必帶衛門  
兵衛親王世俗說補大理之人

きりよ。唐櫓ハ上右りり傳

可備下德所謂譜第器量カ  
幹有識近習容儀富有云

てて。そととあつす。扱面

廳勢 極ハ檢非違の政とき  
く不也歷の字をまん

とへり。累代乃云地古散中

ろと後り

てて。規模とと。たやす

廳屋の唐櫓 亦伏文書中  
を代々入るりのある

くあつてあられくきよ

和名又韓櫓とあり

故実の徳官亦やなれん

規模 規矩墳範也

そ乃ととやとよろり

久我相國 雅実公也

百 久我相國を敬上よて水鏡

土器 かうけとんよまき

いよひ葎會の付れ蓋也土

まて作る正上蓋よびり

海くり也 也足素然云殿上の

定器と云あり昔四位五位

六位殿上より夜つめなる

まくり也是を殿上以て云朝

とありされとも日本記は王鏡

やわれん兼良公も十部兼俱

和名集金梳日本靈異記云其

譚梳為磨利毎用金梳二字也

或況は具ともて他器とす

今堂上く云たぬきは遊年用

階乃るりり西入りと撰て

伴大氏の節云 かこ

行也 是西礼の儀あり

内辨 其日の一礼也

堂下 時の大内記出て出

堂上 紫宸殿へのり也

失礼 ちららんとよむる失

の委也

六位の記 内記と云五

人あり

康綱 甲原康綱正六位上

大外記 藤治以来五代

五位 下日向守源重清男

治年中改姓中原

めきりよ。主殿司大器也

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

てぬりしてうめきり

尹大納云 是中尹と平につら  
 追討 難産何又又乃多及くハ  
 一く上りてんくり 事文類聚  
 云昔顯項氏有三子亡而為  
 疫鬼一居江水中為疠鬼一  
 居河水為野野鬼一居人  
 官室區隅中善驚小兒為小  
 鬼故是以歲十二月命祀官  
 時難以索室中而野疫鬼等  
 東海度索山有神荼鬱壘之  
 神以禦凶鬼為民除害曰剛  
 馳難之神季冬先臘一日大  
 儺謂之疫 呂氏春秋云前  
 忘一日擊鼓驅疫疠之鬼謂  
 之嘗餘亦曰儺  
 洞院の左大竹 實泰公又號

尹大納云 忠入道 遊儺  
 乃上卿とつとめられきるに  
 洞院右大竹教はは身を中  
 後られきるハ又本所男強  
 所とするよりがれ又覺作  
 けしころのこまひくるは又  
 み所ハ老る傍にたよるこ  
 事はされらる老よりころ有る

後山本

次中と中後き 追遊と行客  
 又五郎男  
 衛士 湯門兵衛の被官矢と  
 名目抄の八勝突とあり  
 小半疊のうすうりの和名は  
 軒を車前とてて車のこ  
 きこあり能きひさつきと  
 ハ不同  
 火たきこまきひきりり  
 みる守湯共様火の夜もえ  
 しまきえつ 抽とておまへ  
 大覚寺殿 後宇多院也

洞院右大竹教はは身を中  
 後られきるハ又本所男強  
 所とするよりがれ又覺作  
 けしころのこまひくるは又  
 み所ハ老る傍にたよるこ  
 事はされらる老よりころ有る

予そく 謎の字也 玉篇謎  
禾閉切 隱言也

忠守 丹家康頼十一  
世孫忠守 興薬頭 内院 暴殿  
歌人 正四位下

公明 侍從 兼官也 正親町三  
条 康流也

平氏 忠盛の父也 忠  
盛ハ清盛の父也 忠守 忠盛  
のちかぢ 平氏 瓶子 聲神  
通すらなるあり

あつはあつはま ちの<sup>真</sup>あれ  
あつはあつはま ちの<sup>真</sup>あれ  
あつはあつはま ちの<sup>真</sup>あれ

とま。おそくはしつらつておれ  
きりおまへ。くまう忠守多りく  
アうらよ。伊波大初云 平明卿。  
我知乃ものくもぬ忠守が  
とあそくはせしめらるる唐瓶  
ふんまてしひあられきれば  
服らて退出よらり  
あつはあつはま ちの<sup>真</sup>あれ  
あつはあつはま ちの<sup>真</sup>あれ  
あつはあつはま ちの<sup>真</sup>あれ

あつはあつはま ちの<sup>真</sup>あれ

あつはあつはま ちの<sup>真</sup>あれ

あつはあつはま ちの<sup>真</sup>あれ

あつはあつはま ちの<sup>真</sup>あれ

あつはあつはま ちの<sup>真</sup>あれ

あつはあつはま ちの<sup>真</sup>あれ

あつはあつはま ちの<sup>真</sup>あれ

あつはあつはま ちの<sup>真</sup>あれ

あつはあつはま ちの<sup>真</sup>あれ

とこうせけあつ 不せえき  
あり

ふんあはしたるもあはたせむる

やふにふたりう入給ぬる内たむるかむらむるまか

す。ふもくつがらあまひおはしなむおはたせむるえ

俄わかりもあはぬまひた 弟こ  
たむらぬるもあはた

門カドあたまカてよ 女メあコしメ  
下給シタよりヨリつツつツ細コく

あゆアユちチ ぬヌちチうウらラせセう  
すスんンとトえエ也

いイまマしシちチあアまマいイひヒあアつツ  
いイまマしシこコろロあアまマいイひヒあアつツ也

とらトラてテ内ウチあアまマいイひヒあアつツあり  
いイまマしシちチあアまマいイひヒあアつツ  
てテよヨぬヌちチうウらラせセう 中車ナカクルマハ門カドあアる  
あアまマいイひヒあアつツはハたタ人ヒトにニあアまマいイひヒあアつツ  
いイまマしシちチあアまマいイひヒあアつツあり

あつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちい

あつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちい

あつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちい

あつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちい

あつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちい

あつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちい

あつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちい

あつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちいあつちりあまのきつちい

桂の本れたきまのり 今まを  
ころとをりまよし 時のこと  
とねまひかて桂のまれば  
あつまて足すくまのり  
たまふ也菅家のまよ  
あつすむやしの桂とゆふも  
くらうくまてようりまのり

らうりの囀あはれのえんまうらう  
しあがり出で桂の本の  
かきあうかへまのり  
もえあうてまのり

**原**  
あ乃乃ききまのり 汝のたるま  
らをせたる車たよりあも  
こまのりまのりまのりまのり  
月の明きまのりまのりまのり  
あつくまのりまのりまのり

の月まのりまのりまのり  
あねよふまのりまのり  
あつくまのりまのりまのり

しんぐ之服よへまのり  
あつくまのりまのりまのり  
と下みあり 様塵まのり  
くあつくまのりまのりまのり  
源氏たうかまのりまのり  
えのからまのりまのり  
あつくまのりまのりまのり  
あつくまのりまのりまのり

あつくまのりまのりまのり  
あつくまのりまのりまのり  
あつくまのりまのりまのり  
あつくまのりまのりまのり  
あつくまのりまのりまのり  
あつくまのりまのりまのり  
あつくまのりまのりまのり  
あつくまのりまのりまのり

笠空上人 傳記未定也

高野僧室上人 新へのり

大徳寺

ふよかそ道えて。馬よあつて女はまありふりきり  
 くに引く男ありむきて。解け馬を解けおきて  
 狼藉 藉ハ踏也狼の物とぞ  
 くらしき漢書注すんぞ  
 破戒ニ怖魔ニ云々又翻云  
 除體比在尼通終安為尼  
 得無量律儀故應比立又  
 称阿婆優婆塞名信士男優  
 婆夷名信士女又云清淨士

けり。解い腹あぐとくあへこハ  
 希留の狼藉ハ。此の字子  
 はよま。此よりハ。此よりハ。  
此よりハ。  
 けり。解い腹あぐとくあへこハ  
 希留の狼藉ハ。此の字子  
 はよま。此よりハ。此よりハ。  
此よりハ。

清淨女。雖在居家持五戒男  
 女不同宿故云善宿男。西  
 域記。鄒波素迦唐言近事男  
 舊曰伊蒲塞。又曰優婆塞。皆  
 訛也。郭波斯迦唐言近事女  
 舊優婆塞。又曰優婆夷。皆訛  
 也。言近事者親近業諸佛  
 法故。又曰百歲比立。尼見初  
 受戒。比丘當起。迎進禮拜問  
 訊。請令坐。比丘尼不得罵謗  
 比丘。比丘得說尼過  
 へき過云々。漢氏玉賢云々  
 のきんく。漢氏玉賢云々  
 河海ふい。漢氏玉賢云々  
 いき。漢氏玉賢云々  
 ほうごん 放言云々。漢氏玉賢云々

力まて。此世を壊し入さるとお  
 来る。此れ。此れありとくれ  
 くれハ。引の男。く。此れありと  
 やん。え。く。此れありとくれ  
 人。此れありとくれ。此れありと  
 此れありとくれ。此れありと  
 て。此れありとくれ。此れありと  
 此れありとくれ。此れありと

とあらそひ悪口も也

金本巻二

三十九

てよきしなかり。はらとかり  
くろいさくひあるへし

女乃物いひくけり。逐事。そのあはせよき物ははら

男は育くくは地物うとて。唯出院の時。忘れろ女

忘れろ女。忘れろ女。まも。こくまの男からはまいらく

しよ。鄭もやきく流へると何てかたくれろふ

あふり。はた物と名や。教あぬ力えきくははと

塔川の田方良 具守公也景  
岩倉内大臣

山倉念ふてきこていひやんと作れりきろ織

是ハ難あ。教あぬ力むつ。まど定あらかり。

まへておれこと。女よられぬやうにおろし

浄土寺に前関白 九條公師  
教公号巴心院又号浄土寺

元應二年六月七日薨四十  
四歳

安花門院 後堀川院女御浄土  
寺大政入道公房公の女也

山階の左大臣 實雄実氏公  
の才西国寺の一家洞院実

雄號山階左大臣  
まよのよきうと。人の作れり  
まよのよきうと。人の作れり  
まよのよきうと。人の作れり

夫是巻三

三十九



一此下女の心算もいとくらくくはつていせらへん  
 社作らしき女れあ世ありせ衣紋も冠もいよ  
 もあれむきつくふ人も侍じかく人よそちらく  
 かく人よそちらく女  
 是より一替く女のみあ  
 めつみよ  
 人我の相  
 蔵乘法数云般若四相  
 我相 執取自体  
 人相 数取餘趣  
 衆生相 種々變異相續  
 壽者相 一報命根不斷  
 女。いりりいじき抱とあひ  
 女れ性、皆いりあり人我の相  
 く。貪欲甚しく抱れ理さる  
 け。いゆよひれいふもく  
 うり。いと壽もたらくいり

うね事どもとて河いんす。用意あつていん  
 又あきま一仕事まくとんがてはくはつてい  
 たんりかされるしは男の智恵もあつていん  
 とそん。そ仕事ゆりあつていん。そあ  
 あつていん。そ仕事ゆりあつていん。そあ  
 う。そ仕事ゆりあつていん。そあ  
 がり。そ仕事ゆりあつていん。そあ  
 うりあ。そ仕事ゆりあつていん。そあ

伏魔堂

四十

時やさしきもおもろくもあはれゆくもあはれ

淮南子曰聖

人不可貴尺之璧而車寸之張

晉陶侃

有難得而易失也

曰高惜寸陰人可惜分陰

予陰おむし命をわらふれ

我亦わらうきよの月

予うあまううあまううあまう

羊れこへはゆるり

とくとも是をうおむいまる

生蟻施磨と云ふ似たり

一き人をとめう人とあはれ

謝靈運 小字客兒

人高人の一後をわらむ切也

康樂公世稱謝康樂幼穎悟

剎那おかえはといとも是を

文章之美與顏延之為評左

第一世稱顏謝云

法花の筆受 法花添不

花芬陀梨法花妙法花

いひてふ交の翻譯あれも

冥運りみへあ一了答も冥

法花の執筆ありといへ

とも了答ハ兼好ありはの

世れ人あれん是もむかつ

あ一とれせよゆるりてハ晋

羅什の翻譯して其才子僧

睿う筆受也天生の梵流と

唐主して通ずると翻譯

といふそれを唐字よかきう

とを筆受てう 温盤後ハ

運り筆受也

えこひややんされハ余を後う  
即ちあらあちよゆる。されはる  
人ハともく日月を惜む人  
は。只との一念むあくもる  
と。法お一せへ。そく人  
来りて。我命あすハ必りし  
かり人し。と告志せさん  
よ。きふれらるる。何事との

惠遠白蓮のまろくハ 戸山

のを法師也晋の代人也

佛祖統紀北七庐山の遠公往  
 生浄土の業を脩する故に  
 九品蓮華社友といふか  
 と以て蓮社と云あり 高  
 僧傳曰僧慧遠居庐山與劉  
 遺民等結白蓮社浄土宗の  
 了譽を直牒の才九は惠遠法  
 師衆をまつめは十八日念仏を  
 仍に湖明冥宮を又ま  
 かつんとするを湖明とハゆり  
 一冥宮とハゆりまする人こあ  
 や一及び湖明ハ酒をたりに  
 とうくは放逸也冥運ハ有智  
 精進の人也行とてかれとい  
 れをといきさうといふ惠遠  
 頌と作ていしく 冥運不

たのみ。何事とらいつとみあん。  
 日れくらのきうらふれぬあんそ  
 を時をよとあん。一日れら  
 飲。食便利睡眠云行  
 歩。やむもとえまうておが  
 くの時をうしあふ。そあまりれ  
 暇。いくとくあぬうちよ。冥益  
 の事とら。びやくれとらひ。

入心雜起故淵明競引心專  
 一故とら冥運ハ法花執  
 業れ也雜起心ありて餘  
 行を脩まきうら故也  
 風景のねとみ 風景れ景氣  
 をねとらうらうとみ也は  
 另初と小謝冥運ハ諸邑子編  
 歴をそつころあしと小詩を  
 つくり 風景を氣とみ  
 ろうらりれとみ心雜乱あると  
 て浄社へ入しとを云ゆる  
 さうらり  
 去りくもん  
 死人は同一也  
 止ん人止修せん人そ修せ

冥益の事を思惟して時を  
 うつものこあつひ。日を消し  
 月と直て一生をさうら。むと  
 ろうらあり。謝冥運ハ法花を  
 筆交まりしとみ。あつな  
 風景れ心を観せうら。惠  
 を白蓮の交をゆらさし  
 き。志くくもとあき時ハ死

止ハ止觀以ハ修也  
也是觀修の二也

人よあり。克キキ後ノチあふのため

ふりあし。肉ニクよ思オモひあふかよ世ヨすま

くして止トん人ニあし。修シユせん人ニ修シユせよとせ

人ニあしとて。按アツの字ジ法ホウ義イ百ヒャク。其コノのノりトしシのコ。  
を教シふコト也

人ニあしとて。其コノのノりトしシのコ。  
按アツの字ジ法ホウ義イ百ヒャク。

いどあしとく人ニあし。修シユせん人ニ修シユせよとせ

朝アサとて。肉ニクよ思オモひあふかよ世ヨすま

洞ドウとて。人ニあしとて。其コノのノりトしシのコ。

たりあし。いどあしとて。肉ニクよ思オモひあふかよ世ヨすま

同ドウとて。人ニあしとて。其コノのノりトしシのコ。

聖人セイジンのいどあしとて。肉ニクよ思オモひあふかよ世ヨすま

易イ辭ジ曰イハレ君子クニノヒロ安ヤス而シテ不レ忘ル危キ存ゾ而シテ不レ忘ル治チ而シテ不レ忘ル亂ラン是レ以テ身ミ安ヤス而シテ國クニ家カ可ク保ホ

翰カンもかこつて蹴キかして。韻會インケイ翰カン居イ六ロク切キ説セツ文ブン韻イン翰カン也ナリ

徐シヨ按アツ韻イン翰カン以テ草ソウ為シ韻イン韻イン會ケイ以テ毛モウ髮ヘツ聲セイ韻イン為シ韻イン亦モト曰イハレ韻イン翰カン古コ

今イマ注チユ黃ワウ帝テイ自ジ天テン之ノ勢セイ列リツ向キョウ別ベツ録ロク韻イン翰カン黃ワウ帝テイ造ゾウ以テ練レン士シ或シ

云イハレ起キ戰セン國クニ漢カン霍カク去キョ博ハク穿セン域イキ韻イン翰カン注チユ服フク履レイ曰イハレ穿セン作サク翰カン室シツ

も人ニあしとて。其コノのノりトしシのコ。  
翰カンもかこつて蹴キかして。韻會インケイ翰カン居イ六ロク切キ説セツ文ブン韻イン翰カン也ナリ

也

五六 説文博局戲六  
朱古者鳥昔作博子日  
博盡闕塞之宜得周通之路  
聲謂之博博采格也陳思主  
製雙陸局置骰子一至唐末  
有粟子之戲未知誰置遂如  
骰子至六散合作投擲之  
義今作博非

肩と侍るやん

双乃上よとひいふ

そのまゝに侍るふかえ

とらへしはまきしや

ふりまきせらしむれよ

とく負ぬへきと業して。まゝまゝつらひ

て一めありとも。とくまへへきてよはしく

るーやりの道を志れおとへ。力を治め國

とたもくんひも又志りあり

博 博物志堯造圍碁以教  
子丹朱或云舜以子商均愚

故作圍碁以教之其法非智不能也論語陽貨篇飽食終日無取用心難矣不有  
博奕者卒為之猶賢乎已 孟子博奕好飲酒不顧父母之養三不孝也

酒と除く殺盜婦妾と云律  
波羅夷罪と云唐史八斬頭罪  
と云也人の頭とされん再ひ

生せさううしくいひ重罪と  
犯との懺悔志ても滅せざる

也 五逆罪及之殺母殺阿  
羅漢破和合僧持佛沙血

明日はを國へ

史記伍々晉搆楚平王墓出  
 其尸鞭之三百日吾日暮塗  
 遠吾故倒行而逆施之註子  
 晉言心在殺讎常恐且死不  
 遂本心今幸而報豈論道理  
 乎譬如人行前途尚遠而日  
 勢已暮故其在顛倒疾行逆  
 理施事何得責吾須理乎  
 史記主父偃曰吾日暮途遠  
 故倒行暴施之

見れみりるを  
 史記伍々晉搆楚平王墓出  
 其尸鞭之三百日吾日暮塗  
 遠吾故倒行而逆施之註子  
 晉言心在殺讎常恐且死不  
 遂本心今幸而報豈論道理  
 乎譬如人行前途尚遠而日  
 勢已暮故其在顛倒疾行逆  
 理施事何得責吾須理乎  
 史記主父偃曰吾日暮途遠  
 故倒行暴施之

註言不遂其意顛會蹉跎失  
 時也一曰跌也 異乎蹉  
 踏とあつハ非也

信のまろし礼をとひり  
 莊子盜跖篇比干剖心子胥  
 抉眼忠之禍也直躬諍父尾  
 生溺死信之患也鮑子立乾  
 勝子不自理廉之害也孔子  
 不見母匡子不見父義之失  
 也此上世之所傳下世之所  
 語以為士者正其言必其行  
 故服其殃離其患也  
 毀ともらうといふ

世俗のまろし礼義を  
 てこれどうありはとせはねうひ  
 もおろくが方もくじしく心の暇  
 とあく一生ハ雜事此小若小  
 さへられてむあく言あん日  
 言道とせし吾生改メ蹉跎  
 たり徳縁を放下と入き時也  
 信ともまろし礼義を

之境斯也矣

もあつり。いかにえさらん人か。

物狂ものまがとまじり。うづあ。懐なつかお。ももさく。そ。さ。と

もろろ。あ。あ。が。じ。も。も。さ。く。い。れ。い。

百十ひゃくじゅうはもあまのあつり人か。さ。め。きたる。う。ん。ど。の。つ。つ。

志れひてあらん。い。う。せ。ん。と。い。ら。ち。出。て。男。女。れ

る。人。の。う。人。と。ま。い。ひ。た。り。さ。う。も。ま。あ。く。え。く。じ

きれ。大。う。こ。あ。ま。く。え。く。う。き。事。む。人。れ。と。う。れ

人。よ。あ。り。ら。う。て。興きようあ。ん。と。地。い。ひ。わ。ら。う。救。あ。ら。ぬ

方よて。世のあはえあつ人ぞ。い。て。あ。ま。い。は。は。い。い。て。う。

響ひび應おと あ。う。す。し。う。う。り

八雲やむよ。食た物ぶ海うの。ま。り。た。う

と。ハ。あ。う。い。ま

ま。う。し。き。あ。よ。酒さけ宴えんこの。客きやく人

よ。響ひびを。殺ころせん。と。き。く。め。き。は。る

今いま出で川がわの。あ。い。救きう護ご入いお。し

き。ろ。よ。あ。り。は。川がわれ。う。り。よ。水みづれ

か。う。れ。う。あ。ま。て。ま。あ。れ。は。牛うし

を。返かへら。う。ら。れ。は。あ。が。さ。れ。水みづあ

板いま。て。さ。し。と。か。り。き。う。と。別わか別わか

今出川の扱あつかい。致いたす。菊きく亭てい兼かね

季き公こう也や西園寺さいえんじ太政大臣たいていだいじん實じつ

兼かね公こう三男さんなん也や

有あ栖し川がわ 歌うた枕まくら云い有あ兼かね川がわ本院ほんいん追お

ふ。ち。り。や。あ。う。い。つ。と。の。ま。れ

あ。う。す。の。あ。れ。と。と。し。あ。う。う。け。は

ま。む。ひ。へ。き。未いま経けい前ぜん太たい

大皇大后たいすうたいこうま。ま。の。い。つ。さ

と。ち。か。う。兩りやう中ちゆう院いんの。し。松まつ枝え

堰ゐづみ水みづと。ま。を。後ごに。ま。つ。と。倉くら

又いづくも大宮にふみまらハ  
 あれはありと申いひまら  
 をもろくつらうれ 西行法師  
 在寺院たりとせ候ては候れ  
 まをささきろふおろては  
 うけつて女をよやつらり  
 くらとあん 一葉抄子存分  
 の糸文代也まは候候のあ  
 べと川小浜り候候れ候院の  
 扱まは此紫野よあつと  
 あつとあつと 是がごのあつと  
 太泰忍 信清公也号坊口又  
 号太泰内府因白道隆公の  
 後也  
 料の山牛飼 天子の山牛飼  
 の也

山車はさりのよふきつら。希みは  
 童成。かてるあまて山牛をいよふ  
 抽るといひつらうれ。舞の殿  
 山氣をさあくおろて。とれ建車  
 やらん事。まはれよ候きつて  
 えさし。希みは男ありとて  
 山車よ頭をうらあつられよ  
 たり。こけき名のさいまれを。

女房のなまも そな名義未詳

うらま 在秦殿の男。料の山牛飼 うらま

抱り。ぴうらあさ敵よ侍りきろ女房のなまも。  
 一人を祀まきち。一人ハとあま。一人ハまも。  
 一人ハまも。とつきつられまり  
 宿河原 務津國あり  
 かくく 暮露とまといへも  
 梵海とまへまは東國まへ  
 も傍をいよとちりかくくの  
 まじとみ物一袋ありそのま  
 ろよよくねまへり  
 ね。まじ中まいあまも場とやわろやかりまはと。

夫遺三三  
 四十七



尋ふれば。その中より小あきりゆくまゝ。かくれ給へたを  
 こそとふれ。事カレ禁裏カレまこ中老也。そのまじり師あふ  
 りと中人東國まで。いあせりと。かろよころさ  
 せりりと。ぬりりくた。その人よあひまつて。根中  
 さもやと。歩ひて。尋中やと。いふ。いふと。ゆくと  
 も。尋おひりり。さう事作りき。こもて。對面し  
 たてまつり。道場みちばをせり。ゆり人し。あかの川系へ  
 まつりありん。あまう。こもて。いふ。いふ。いふ。いふ。

又つき給ふ。あまひ。いふ。いふ。いふ。いふ。佛事ぶつじは。婦よ  
 侍人し。といひ定て。二人川系へ。あひひて。心こころ  
 づりよ。つねき。あひひて。ともよ。たよ。り。かろくと  
 いふ。その。背せい。ま。り。き。ろ。よ。あ。を。ま。き。世。よ。か。ろ。ん。し  
 禁裏カレ字じ渥おままといひ。くろ。あ。を。ま。き。世。よ。か。ろ。ん。し  
 名。世。と。捨すて。ろ。よ。い。て。我わが執とり。く。伝でん道だうを。ね  
 ぶ。よ。似にて。廟みやう諱ごんを。あ。と。す。放はう逸いつ無む惣そう心しんは。様やう  
 あ。世よとも。死しと。か。ろ。く。して。あ。ま。あ。つ。ま。さ。る。か。こ

の。ふまきよくおやして人のふらし。願へ  
うきつぎをゆり也

報ハ寺院の号。さうぬらつ凡物ま。ふとつら  
事。びくれ人のすくも求は。てありれまに  
やしく付きる也。げはきふりく薬ハやまをわ  
いさんと。ころやにまゆい。びつ。人のふ  
もめかれぬ文字をつくとす。益あまき事  
あり。何事もめら。し。此事をり。あ。夫ハ後ハとこ

のむハ。浅ハ女ハ人の。うあ。は。あ。事也。と。也

論語益者三友損者三友。あ。あ。あ。  
みり。と。は。わり。る。く。せん。と。  
あ。き。人。ハ。更。ハ。必。備。事。あり。且  
う。き。人。ハ。血。氣。さ。う。ん。あ。う。故。ハ  
陸。放。翁。う。少。年。豪。英。の。吏。也。  
同。参。の。後。兩。子。志。々。す。と。い。つ。り  
カ。つ。も。れ。人。ハ。多。多。暑。と。か。れ  
は。又。飲。食。と。も。恣。は。せ。ら。う。故。ハ  
何。を。そ。と。あ。ふ。事。あり。酒。と。こ  
の。む。人。を。事。の。こ。れ。を。を。を。  
れて。也。た。げ。く。勇。る。共。也。一。物  
乃。い。り。ふ。力。を。三。れ。て。父。母。の  
憂。を。の。こ。す。事。あり。言。は。す。  
ふ。人。ハ。万。事。た。つ。へ。り。と。飲。ふ。り

一。五。さ。く。や。ん。と。あ。き。人。二。五。  
ワ。き。人。三。五。六。病。あ。く。方。つ。炎。  
三。五。六。酒。と。この。む。人。又。五。六。武。人。  
さ。め。つ。共。六。五。六。虚。言。と。う。人。七。  
五。六。欲。あ。き。人。よ。れ。友。と。あ。る。  
一。五。六。地。ら。う。な。二。五。六。と。し。

きんハ久委念驛念くく念の念きん念  
よろすふ念さ念ふ念ん念

鯉の養念く念い念ろ念月念ハ念髪念そ念き念

魚を膠念ふ念れ念つを念鰓念と念い念

潰碎録念小鯉念魚膠念を念墨念す念

磨念て念カ念ヲ念マ念セ念ん念妻念黒念小念

一々念變念ま念へ念と念あり念

雉 儀念礼念相念見念之念贊念各念執念雉念大念

夫執念鳳念法念雉念取念其念守念介念不念笑念

節念鳳念取念其念候念時念而念行念也念昏念礼念

納念采念用念鳳念

松茸 本草綱目小菌念茸念比念類念

お念り念杓念茸念と念あ念つ念ハ念松念茸念比念

孰念さ念る念く念へ念し念く念け念る念を念ひ念と念

耳念と念云念目念か念り念茸念を念字念を念

三念五念ハ念智念恵念あ念つ念友念

鯉念乃念あ念つ念も念れ念く念ひ念ろ念日念髪念そ念き念

き念す念と念あ念ん念ふ念く念は念ま念つ念く念物念

あれ念ハ念ね念ぐ念り念ろ念地念よ念ろ念。鯉念え念

り念ろ念ろ念水念前念ま念き念ら念ろ念地念ま念れ念。

や念ん念と念あ念ま念き念臭念あれ念鳥念よ念ま念雉念

さ念う念ま念れ念地念あり念。雉念松念茸念を念も念ろ念。

内湯念殿念れ念ん念か念り念ま念ら念も念ら念じ念

也念き念耳念の念字念を念あ念や念ま念れ念  
示念さ念る念へ念。

貞和集念有念松念茸念須念茸念字念た念た念  
正念康念茸念の念茸念比念字念義念を念以念て念

乃念れ念ハ念松念茸念比念可念書念執念

中念文念 後念深念草念院念の念中念文念也念

山念入念道念教念 西念国念寺念の念災念氏念

公念也念常念盤念野念相念國念と念其念以念則念

中念文念の念父念也念

乃念ハ念雉念より念使念さ念れる念故念ナ念大念丈念

ハ念唐念を念と念り念て念君念子念の念み念え念士念

ハ念雉念と念り念く念礼念を念あ念す念也念

佐念と念い念版念ニ念雉念を念用念ひ念存念と念

ま念ら念ハ念是念日念の念故念実念さ念る念

り念す念。ふ念か念ハ念公念う念地念事念あり念中念  
え念れ念内湯念殿念れ念ん念か念ら念ろ念之念棚念  
ハ念鳳念比念ん念え念つ念ろ念山念入念道念教念師念  
使念て念海念を念流念す念や念ろ念山念文念  
王念て念。あ念れ念地念さ念あ念ろ念ろ念を念深念み念  
て念。た念た念あ念ま念わ念れ念し念し念と念。あ念あ念ろ念  
い念ん念。さ念ん念あ念き念る念也念。ん念く念し念  
き念ん念れ念ま念ら念ら念ぬ念故念の念く念ら念あ念

とヤされたりきり

鯨と云字本草綱目讀書等に  
分ぬありす海篇心鏡子鯨

海魚乃海にうらふといふ魚

立堅太鯨也とあり万葉集  
第九氷江之浦魚見之堅魚

ハ皮さうしひまはらうあきりの

釣鯛釣矜及七日と云へり又  
式於太捕石止堅魚於片と

ま。比はとてあす地ありぞ

いへふ人の言も同才八子の  
まり倭名集よも鯨魚加且平

まも鯨魚此年あはれや侍へ

とあつ時ハ鯨とも堅魚とも  
虫也此也ハ昔よりくさふか

い魚子のねくさうくまへ世ま

くれさき與也

てハさうくきへ入のあへ出

ふしと侍へたりた。頭ハ下部もくりす。きりて換

侍。地ありとぞれた。かやうれ地も世の末はあれ

上さふもあても入へりさふう侍れ

唐の地ハ素れや 音騰麝香の類也

唐乃地の素れや 音騰麝香の類也

とかくま。書たへげ國おれ

ゆくむろありぬまのがきこ

うつてん。さうくさふひたあはらうぬ道よ。あ用れ

地ともれさうりつて。あはらうぬ道よ。あ用れ

唐の地ハ素れや 音騰麝香の類也  
類也ハよまの地也  
尚書旅獒篇不室遠物則遠  
人格 老子經曰不貴難得  
之貨使民不為盜

とんていとおもはるるのちよめおんちるるや

周礼六畜注 畜可畜者六畜牛馬羊犬豕  
雞養之曰實用之曰牲又云  
在野曰獸在家曰畜  
同詩救反 莊子秋水篇何  
謂天何謂人曰牛馬四足是  
謂天落馬首穿牛鼻是謂人  
郭象注云人可不服牛乘馬  
牛服牛乘馬可不穿絡之乎  
當也苟當乎天命則雖寄之  
人事而本在乎天也希遊尸  
義云牛馬四足得於天自然  
者不絡不穿將無所用此便

やしあひかよ物よ馬牛つお  
きくるしじつらうぶらり  
なれおあくてうおさぬおま  
えらうへせんたへまらうあせ  
くつとめ人よおまらうこれえ  
必えへしきれと家とんああ  
おあれハお文いりあかりすと

是人心一段事

犬八歯よりやせく 金樓子

陶矢無守夜之警 無司  
晨之益 東坡云養猫以捕  
鼠不可以無鼠而養不捕之  
猫蓄犬以防姦不可以無姦  
而蓄不吠之犬

孟子雞鳴約成相  
聞而達四境 老子云鄰國  
相望雞犬之音相聞

莊子天地篇因  
以為得乎則鳩鴉之在於籠  
亦可以為得矣在繯繳之中  
而自以為得則是罪人也  
指而虎豹在於囊檻亦可  
以為得矣 司馬遷報仕少

もありあんそおの畜獸とく  
て用さるに物あり。さるきさ  
ものハたりは。め。さるりと  
れ。お鳥の翅ときりお籠よ入ら  
てて。お雲とてし時。おさ。お  
愁やむ耐あり。も思らるる方よ  
あさりて。恐。く。おあ  
人はさるる。ま。お。生さるる

卿書曰猛虎在深山百獸震  
心及其在檻穽之中搖尾而  
求食 東坡詩三云鳥囚不  
忘飛馬繫嘗金馳

生とくろりめて

夏禁禁違ふく百姓とやめり妹喜と愛して醜室と佐也

牛飲するとらてよろこひ國童達と殺す又殷紂妲己を寵し婦人の云と

よまろくひ康基鉅橋とつらうて天下の賦とあつめ約言奇物とを室まみち

とさ酒池肉林とついやしく長夜の飲とあり熨斗燔烙の刑を行ひて人民

とやまろく朝ふ渉の脛ときり買人の公とさささるるめり女の胎内をさ

そ皆をさるるめて月とよろこりむる也果しく禁紂國家とろりまひ

力をわろわす

王子猷うも 章孝標和詩阮

籍嘯鳩人夢見子猷着風鳥

携烟け句朗詠あゝ士微之

字子猷義之君子也風流此人

也晋よはてて為黄門寺中常

しめて。目とよろこりて

ふも。禁紂の公やまふ猷り

ふも。禁紂の公やまふ猷り

ふも。禁紂の公やまふ猷り

ふも。禁紂の公やまふ猷り

ふも。禁紂の公やまふ猷り

ふも。禁紂の公やまふ猷り

ふも。禁紂の公やまふ猷り

竹と愛して捨てたる竹とい

えと云は侍の公は竹の烟

ふものといつ遊棲するをえ

て愛とら義之

あつしきも 尚書旅獒篇

珍禽奇獸不取于國

人の文徳は又あきまらうか

六経に書とらみあきまら

て聖賢の道を知と才一と

寸も道ハも片父子夫婦兄

才朋友の事よまらうりて

そ教ハ仁義孝弟忠信り

すきん

醫術とあふ 晋張華采陶真

白唐孫思邈く類全く醫者

んめつしした會あやし

獸。國おやかりすとも

文ものゆらあれ

人の文徳は又あきまらうか

聖賢の道を知と才一と

寸も道ハも片父子夫婦兄

才朋友の事よまらうりて

そ教ハ仁義孝弟忠信り

みわたりす学問のよきもの  
て醫とてそのよきもの

忠孝のつとめも醫ふわりの  
小学曰伊川先生曰病卧於  
牀委之庸醫比之不慈不孝  
事親者亦不可不知醫

弓射馬の事 周礼注礼樂  
射御書數謂之六藝

食人の天也 帝範勢豊篇夫  
食為人天農為政本倉廩實

則知礼節衣食之別定廣  
史記縣食其傳云王者以民  
人為天而民人以食为天

多能ハ君子の能ハ也 論語  
子罕篇大宰問於子貢曰未  
子聖者乎何其多能也子貢  
曰固天縱之將聖又多能也  
子聞之曰大宰知我乎吾少  
也賤故多能鄙事君子多乎  
哉不多也

活多子巧は活けり妙ありハ  
文選十六思舊賦序嵇康博  
綜技藝於絲竹特妙  
尚玄の道 八雲抄子知多子  
尚玄華あり

みらふへし力をやしまひ人をた  
とせ。忠孝のつとめも醫ふわりの  
事。六藝（射御書數）子出せり。必是はさう  
りかへし。文武醫は彼よりなせ  
てハ省へるは。是とてまらんを  
えんがうとある人ともいふ人  
は。食人の天あり。よく味を

洞悉れる人々あるは。活とて  
し。は。細（ま）又よろつと要（ま）なり。  
け外のしとも。多能ハ君子  
乃をみる也。活多子たを  
わ。糸竹は妙ありハ。活（ゆる）を  
も。今この世もこれとてまらんを  
世とてさむる事。やうなを

とろりあるり似たり。金は寸くばおれぬ。鐵くろがねの蓋ふたにききお志こころありさるる。一

第一食物 驚座新書云居服

食三等湯東谷語人曰学者居中等屋衣下等衣食上等食何者茅茨土階非今取宜凡屋八九間僅蔽圖書足矣故曰中等屋衣不必綾羅錦繡也夏葛冬布僅適寒暑足矣故曰下等食至於飲食則當遠求各勝之物山珍海錯名茶法酒物之備庶不為元流俗士故曰上等食

守まも蓋ふたのしもとあして時どうつとと。あある人とも僻事ひがしする人たのめ。國のた沈志れあよやむしととゆるとしくあせへきさるおかり。そあありの暇ひまいそくあは

人改よりくらわれの疾病なくしてかかひさるものあり故孔子も初戦疾のこれものをつてしめり

けりけりさるを 食と衣と居而と茶とを合せててとす 杜甫詩分類七多病既須唯藥物微軀此外更何求

とをかくは。風ぬよをくこまことして用はす。病やまと

樂たのしみとの但人皆病あり。病やまはさうされぬ。病やまを愁うれ悪あひく。一。醫い療れうを日するへう。業わざをくらして。のしと求えさるるとまのしと。病やまをくこまことして用はす。病やまと



と云い。この外とともめい。とあむとれ。と云ふ。  
この事<sup>けんやく</sup>候物あり。誰の人うた。く。とせん

是法法師 新千載集第十八

雑言下是法法師

の世そ。も。同。一。き。世。と。安。地。と

し。う。あ。る。山。よ。か。と。か。く。こ。ま。り

又新撰拾遺集第八秋牙子

兼も。い。く。山。あ。ら。し。ゆ。て。衣。ま。れ

く。ま。り。こ。の。門。よ。こ。の。り。の。月。り。き

向極い。と。あ。く。と。り

入。よ。と。ら。れ。て。定。十。九。日。に。佛。事。お

成。能。と。法。し。ゆ。よ。説。法。い。と

と。り。あ。り

い。は。ま。り。こ。の。り。く。と。一。思。人

の。こ。と。人。と。と。り。あ。り。と。り。あ。り

く。と。皆。人。流。と。あ。り。し。ら。り。導。師。の。ま。と。て。候。説。法

れ。人。と。も。い。つ。ら。り。も。と。い。か。お。い。た。う。と。く。お。お。を。ゆ。り

つ。と。感。し。あ。へ。り。返。事。子。或。者。の。い。と。く。あ。お。と。も

い。へ。あ。せ。が。と。唐。の。物。子。似。い。あ。ん。う。へ。と。い。ひ。こ。の。世。に

あ。れ。も。と。め。て。あ。り。か。り。ら。り。さ。う。導。師。の。か。め。や。う

や。い。ま。へ。き。又。人。の。酒。す。む。ら。と。と。と。は。世。に。入。て。人。よ

志。の。あ。ん。と。す。ら。ら。ん。と。す。ら。ら。ん。と。す。ら。ら。ん。と。す。ら。ら。ん

也。二。方。よ。ん。つ。き。こ。う。拍。あ。れ。い。と。こ。う。と。き。い。先。然

頤ときろぬ。人さへえきくぬ也。その色先碎  
てつかい。いものめきとや記。惣よてきりこ  
ろきりりりりや。いとおうり記

は後万事のころへき也。陰極而  
陽生の心也。天地萬物の道り  
むし

百六十一  
まが  
をくらぬきいまりて。波アかく

くらきんとせんよ。あひていり

かす。を海つきてかづき時のいれるとちる人し。  
を時とちると。いれをくらとふありとある者記

論語先進篇曾人爲長府閔子  
嘗曰仍舊貫如之何何必改作

百六十二  
たけ  
改めて益を記る。いあつため

ぬとりのとすり也

雅房大納言 正二位村上源  
氏號後土御門太政大臣定

雅房大納言いりくくも記

院 山附院所取三院あり由  
寸後深草龜山後宇多也但

人よて。大納言もふさるやとおか

後深草龜山當附法皇欽  
近習 札記月令禁近習注天

一きり此院此を記ある人。只

子親幸者習者狎也近きか  
あくと云

今沙まのきこもとん伝りつと  
やされくれ。何事うととせ記

きりよ。雅房神たけ宿るよかんとて。いきたる大の星と

きり傳つると。中まうり牆の穴あなよりえ伝つとやされを

およ。ともすくもくおやめ。日來此れ氣を  
 もたうひ。昇進セウジンもさくすくさくさくさくさく  
 福フクさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 とも也。虚云ハ不使あれともかがることときくせ給  
 てよくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 いくらものところ— 仏法  
 殺生といひめて放生と  
 ともるなり  
 畜生殘害 殘害ハそこあひや  
 少り也。獸虫魚のたうひよ  
 ぐひおふと畜生殘害と云  
 しためたうりめてあそひたの  
 しゃん人ハ畜生殘害乃た

くひや。あのも黙ちいさ記書あり。かすと見  
 てゐ。根をさくさくさくさくさくさくさくさく  
 主婦ウヂウメと女あひねさみいさくさくさくさくさく  
 一余残行めり事。ひとよ愚癡ウチありゆへよ。  
 人のりもよさくさくさくさくさくさくさくさく  
 へ命とさくさくさくさくさくさくさくさく  
 きて一切の事ウチをさくさくさくさくさくさくさくさく  
 へ備りありん

顔回

論語公冶長篇子曰盍

各言爾志顏淵曰願無伐善

無施勞朱子注云伐誇也善

謂有能施亦張大意思謂有

切或曰勞事也勞事非已

所欲故不欲施之於人

拙と云たらう事 云たらう

ハセじらぬ 宛字也 冥の

罪と云うて云ひくこと

ゆるさを宛と云又厯字とせ

くらうとよめり

賤き民の志 論語云匹夫不

可奪志

いふさるさ子ととり

禪録 難陀と云はあり

おとろき人のよろこひいり

顔回ハ志人ノ志トナシト

ありて人にとりしめ拙と云

へたらう事いやしんば志と

とらふへらう事又いときおれ子

浅すうおろいひとらしめ

無じらう事ありおとろけ人の

おとろけおれ人ともありん

とらふおとろけおれ人ともあり

おとろけいひくこといひしめ

きこひ。彼はねあう人。是と

あやうて無じらう事。意怒

のふよありん。おとろけ人の

よろこひいりらうあひいり

も。皆虚妄なれとも。まじら

実その相よまじらう。かたや

あるとも。おとろけいひくこと

喜怒衰樂の七情もこころ

病とらう。陶隱居云人生

氣中如魚在水水渴則魚瘦

氣昏則人病邪氣之傷人最

為深重精神者本宅身以為

用身既受邪精神亦乱

茶とのこころ汗とこころ

嵇康養生論夫服藥求汗或

有弗獲而愧情一集渙然流

五十一

五十二

離絡朝未餐則置然思食而  
曾子銜哀七日不饑云々

凌雲の額と書て 世説新語

補十六云凌雲臺樓觀精巧  
先稱平衆木輕重然後造構  
乃無錙銖相負揭臺雖高峻  
常隨風搖動而終無傾倒之  
理魏明帝登臺懼其勢危別  
以木杙扶持之樓即繡壤論  
者謂輕重力偏故也 洛陽

官殿簿曰凌雲臺上壁方十  
三丈高九尺樓方四丈高五  
丈棟去地十三丈五尺七寸五分也  
登稜題之既下頭鬢皎然因救兒孫勿復學書文並又録二韋誕字仲將京兆杜  
陵人僕端字有文學善屬辭以光祿大夫卒傳伯四体書於曰誕善楷書魏官  
觀多誕取題明帝立陵霄觀誤先釘榜乃筆盛誕轅軻長緇引上使就題之去地

そこある事於其。病とらら

と。あつては。公よりうく。あり

ま。ころ。病。すく。あ。業。を。た。て

て。汗。を。求。り。ま。あ。じ。し。あ。お。と

あ。ま。と。ら。一。旦。恥。お。そ。も。ま。必

あ。せ。と。か。う。す。ん。の。志。口。ま。こ。あり

韋仲將能書魏明帝起殿欲安榜使仲將  
二韋誕字仲將京兆杜陵人僕端字有文學善屬辭以光祿大夫卒傳伯四体書於曰誕善楷書魏官  
觀多誕取題明帝立陵霄觀誤先釘榜乃筆盛誕轅軻長緇引上使就題之去地

二十五丈誕甚危懼ノチテ  
孫綽此楷法著之家令又  
魏書二十一有韋誕傳

といふことを知へし。凌雲を  
額と書て。白頭の人とあり。

ためかきよ抱き

物にあつて。そのまゝと

き。て。今。よ。ま。さ。う。ひ。ま。う。か。成

ほ。ふ。し。く。人。と。ま。ま。す。る。は

あ。う。は。よ。ろ。つ。の。遊。み。の。勝負

と。この。ま。ま。人。を。勝。て。真。あ。ん

と。の。ま。ま。と。書。て  
老子云曲  
則全枉則直夫唯不爭故天  
下莫能与之爭

我力と後めて 論語仁者

已欲立而立人己欲達而達  
人老子云欲先民必以身  
後之又云不敢為天下先  
故能成器長

ためあり。そのまじり難く、あつてもいふことばよ  
ふ。まさしく、あつてもいふことばよ。又、あ  
らう。まじり難く、あつてもいふことばよ。又、あ  
あつてもいふことばよ。人よ、いふことばよ。又、あ

むらまき中よ、あつてもいふことばよ  
張子厚、東銘、言出於思也  
威動作於謀也

我がこと、あつてもいふことばよ。又、あ  
まじり難く、あつてもいふことばよ。又、あ

あつてもいふことばよ。人よ、いふことばよ。又、あ  
まさしく、あつてもいふことばよ。又、あ

あつてもいふことばよ。人よ、いふことばよ。又、あ  
まさしく、あつてもいふことばよ。又、あ

人よ、いふことばよ  
孟子、無名之指、屈而不信、指  
不若人、則知惡之心、不若人  
則不若惡、此之謂不知類也  
又、云、不若人、何者、人有  
中庸、云、子曰、射有似乎君子  
失諸正鵠、及求諸其身  
善よ、あつてもいふことばよ  
論語、曰、願無  
伐善  
大なる職、孟子、齊、辯、の、位、を  
辭、し、方、鐘、の、縁、と、し、き、す、一、百  
の、兼、金、と、し、と、し、の、教、也

あつてもいふことばよ。人よ、いふことばよ。又、あ  
まさしく、あつてもいふことばよ。又、あ

負いきそのハ 曲礼云負者  
不以貨財為礼 老者不以節  
力為礼

負いき者ハ賊とりちて  
礼と。むらう者カとそ

りて礼と。そのうもなりて及んる時。  
違ふやむと智とらへ。ゆらとんハ人の  
あやまりあふ。よきして。きかへる。ま  
よのまうあまのせ。まうして。かまされ  
ハ盗らう。おとろく。かまされ。病とらう。

鳥羽殿 白川院應徳三年立  
鳥羽殿

元良親王 陽成院の皇子  
元日葵多の姿 朝堂の耐よ

てらきくはれ。いふあり

大極殿 拾芥云木極殿朝堂

むりよりれ。あり。礼良親王

院正殿名ハ者院又云ハ者

之日の姿か。た。甚。対勝り

院天子臨朝即位諸司告朝

して。大極殿あり。鳥羽の儀り

取又謂之中臺  
李弘王 延喜抄字式於御車

道まて。たえ。き。の。李朝王

明親王也其ありり。のハ記録を李弘王記と考とて式記と吏記と云々ハ法  
式をとり考と吏と云也。行理行吏行李の字皆通用とらる音因一きぬ之  
左傳正義ハ云々

の記よ。ゆると。や

東枕也 礼記云寢時東首  
孔子も東首と云

百三十三  
東枕也。礼記云。寢時東首。孔子も東首と云。

論語鄉黨篇云疾君視之東首加朝服抱紳朱子注云東首以受生氣也新安陳氏曰天地生氣始於東方或曰疾君視之方東首常時首當在邪邊札記自云寢常當東首矣平時亦欲受生氣恐不獨於疾時為然朱子曰常時多東首亦有隨意則時節如記云請席何向請衽何趾遠見得有隨意向時節然是東首故玉藻云居常於寢常東首也常寢於北牖下君臥疾則移於南牖下

赤之の遙禱へらみよ向せある南よあり

と枕して陽氣候うへき故に孔子も東首に寝たり寢殿の志つひ或は南枕を其事也白河院は北首に涉寢ありき了少いむ事あり又伊勢は南也を神宮は北方故に跡よせざる事いうくと八中より但を

高倉院 白河院第三の

三昧 此云調真定又云正定

亦云正受主峯疏云不受諸受名為正受遠法師云夫稱

三昧者何專思寂想之謂也思專則志一不分想寂則氣

虛神朗氣虛則智恬其照神朗則無幽不徹斯二乃是自

然之玄符用一而致用也云天台止觀畧明四種一常坐

二常行三半行半坐四非行非坐云四種三昧皆依實

相實相是安樂之法四緣是安樂之行取以始末皆在法

花即法華三昧之妙行也翻譯名義集詳也

百集

高倉院乃法華堂其三昧傳ある

の律師とも名のあむ或時

後ととりて顔とつくと見え

我形の見えとて法ありきこと

と維よかきくありて鏡と

ともありてありてきれいあり

ありて後と見えよむるあり

とありてありてありてあり



洗ととりて 三國志魏夏侯惇  
 從征呂布為流矢射中傷左  
 目時受侯淵子惇為將軍  
 中呈惇為首夏侯惇怒之每  
 覽無盡怒輒撲擊者地  
 白樂天感鏡詩今朝一拂拭  
 自照顧顏容照罷重惆悵背  
 有雙盤龜 許渾詩高歌一  
 曲掩明鏡昨日少年今日白頭  
 人のふとせむさうりて  
 論語学而篇不患人之不己  
 知患不知人也注尹氏曰君  
 子求在我者故不患人之不  
 己知不知人則是非邪正或  
 不能諱故以為患也

あしや雲のつらめりりよあひ  
 て。花あふりと夢ゆいし。音  
 りくききう。かききあふも。  
 人のふとせむさうりて。  
 ちくちくあふも。あふもあふも。  
 およよあふも。あふもあふも。  
 まよよあふも。あふもあふも。  
 人ふとせむさうりて。

人のふとせむさうりて  
 論語学而篇不患人之不己  
 知患不知人也注尹氏曰君  
 子求在我者故不患人之不  
 己知不知人則是非邪正或  
 不能諱故以為患也  
 あしや雲のつらめりりよあひ  
 て。花あふりと夢ゆいし。音  
 りくききう。かききあふも。  
 人のふとせむさうりて。  
 ちくちくあふも。あふもあふも。  
 およよあふも。あふもあふも。  
 まよよあふも。あふもあふも。  
 人ふとせむさうりて。

むねをちりてあはれなる人  
人生待足何時足末者得爾

亦是閑

茲とまの 尚書大禹謨金鑑

在題

あはれなる人 退くはる。老ぬと

あはれなる人 安んずる。安んずる

あはれなる人 安んずる。安んずる

あはれなる人 安んずる。安んずる

あはれなる人 安んずる。安んずる

あはれなる人 安んずる。安んずる

あはれなる人 安んずる。安んずる

あはれなる人 安んずる。安んずる

高警詩 人生莫遣頭如雪  
得春風亦不凋

あはれなる人 安んずる。安んずる

あはれなる人 安んずる。安んずる

あはれなる人 安んずる。安んずる

あはれなる人 安んずる。安んずる

あはれなる人 安んずる。安んずる

あはれなる人 安んずる。安んずる

あはれなる人 安んずる。安んずる

鐵槌卷二

賢季大納言 法興院撰政兼  
家公未孫号楊梅

あはれなる人 安んずる。安んずる

具氏宰相中將 村上源氏通  
方卿孫通依卿子

あはれなる人 安んずる。安んずる



形くんとヤまじらう。大物さくはんといふのあり  
 て。是ハきいろともあはれん。よよよよよよよよよよよよよ  
 系と。ともよりあつたるはあつたる。きいろともあ  
 為るん。ともあつたるはあつたる。大物さ  
 取保 保ハおがすこよあつ  
 其の化とあつたるはあつたる  
 こつてハあつたるはあつたる  
 あまのいせとせられろ也

故法皇 花園院号 藤原法皇

百五十六 ありとせ。故法皇の沙

ふとせ

におくまうひて。供沙れまひりろふいし海りり侍系  
 供沙のなと。文字も切能を尋下されて。そつに  
 中侍ハ中系よ法沙ありせられ侍さう。むと  
 本草 非農くめつ 徳とよ  
 梁陶隱泥と注し 唐宋乃  
 儒醫代と増業あり  
 六条のぬ内府有房 従一位  
 内大臣和漢の才強事也村  
 上源氏通光公孫也  
 志不と云文字 韻會鹽余廉  
 切説文 賦也 从鹵監声 古者  
 風沙初作者 海鹽徐曰 黃帝  
 臣也 集韻 或作 鹽 俗 作 鹽

いもやあやまり侍じとや  
 ころ。耐し。お條板内府あり  
 流て。有房ついてよ物あつひ  
 侍んとて。先とあといふ文さる。  
 いつきの篇ふり侍んととつれ

非是ニハキチ監居シヤク街切ケツ从取ツグ非是ニハキチ臥ハ三ニ貨カ切ケツ伏フツ也也从取ツグ臣取シヤク其カ伏フツ也也入ニ臣事シヤク君カ俯フツ倭カ也也

いづの偏 文字の變つて

云とき 偏旁と云也

とよみまうてと云 どのと

まうてと云ころと云 澤を

とよむと云あり

秋藤アキフジようユウひヒせセイとトれレがガあアりリの

山下ヤマノとトあアりリ康カネ此コノかカくクらラあアり

拙人シヤクジンハハまマなナむムくクしシあアりリ乃

山ヤマ北キタのノむムこコあアまマとトよヨむムあり

よりるふ。上篇よふとやれた

了シきキれたレ也也のノむムこコあアまマとトよヨむムあり

くクれレよヨりリ。ゆユりリはハいイはハらラえエうウりリまマて

れレへヘゆユりリきキとトあアりリあアり

とトよヨむムれレきキりリよヨふフかカみミふフか

とトよヨむムれレきキりリよヨふフかカみミふフか



白紙

真  
白紙

